

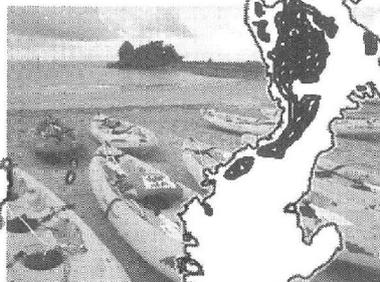
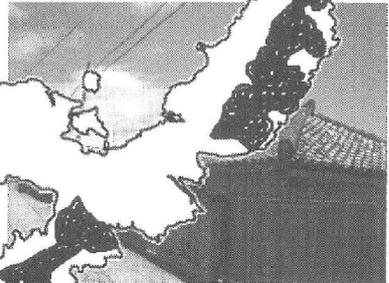
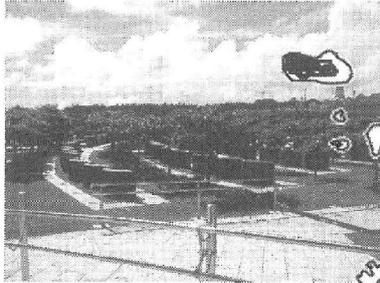
日本聖公会

全国青年大会2008in 沖縄

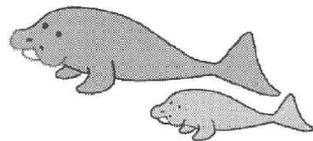
報告書

「そこにキリストは共にいる」

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。(ヨハネの手紙 1B)



- 写真//左上から時計回りに
ガマ・平和の礎・民家
辺野古/米軍基地一有刺鉄線には訪れる人々によって無数のピースリボンが結ばれている
辺野古/待機中のカヌーー 調査船等が現れると、このカヌーで海へ向かい非武装の抗議をする
辺野古の海-珊瑚のリーフが広がり、ジュゴンも出没
- 地図上に赤く印された箇所は米軍基地として使用されているおおよその場所



NSKK Youth Assembly in Okinawa 2008

8月20日(水) 15:00 → 23日(土) 12:00

会場：沖縄県内各所

参加費：35,000円(ただし交通費別)

内容：戦争体験(講演)、戦跡フィールドトリップ、辺野古新基地建設阻止座り込み他

集合・宿泊：パンフィックホテル沖縄

||| フィールドトリップで渡嘉敷島コースを選択決定となった方は、別途5,000円往復船賃等を申し受けます。

||| 参加費は当日会場で徴収します。(事前に振込みの必要はありません)

||| 全日程参加を原則とします。

1. 「巻頭言」

実行委員長 松山健作

日本聖公会全国青年大会 in 沖縄 2008 にて、私たちは辺野古という現場を訪れた。辺野古基地建設阻止活動をされている方々のお話を聞き、体験し、学ぶことができた。私たちは多くの仲間と共に多くの「命」に触れ合うことができた。主に感謝である。

辺野古では、1998年からのおよそ10年間、戦いが続いている。そこで活動されている方々は、自らの命を削りながら、世界の平和、沖縄の平和、自らの平和のために苦難を惜しまない。私たち聖公会青年はそのような現場を訪れ、主に真の平和を祈った。私たちは辺野古に主の御力が働くことを切望する者たちとなった。そして、辺野古に近い将来、勝利が訪れることを願う者たちとなったのである。

辺野古基地建設阻止運動は、今すぐに勝利することは難しい。しかし、近い将来必ず、勝利する日が訪れる。それは、新約聖書に現れる終末観と似ている。私は特に『ルカによる福音書』に見られる終末観を思い出さずにはいられない。ルカは近い将来、必ず終末が訪れることを顕著に現わしている。そして、神の国の訪れを示唆している。私も辺野古に近い将来、神の国が訪れることを確信する一人である。必ず、近い将来辺野古は基地建設阻止に打ち勝ち、平和な日々の生活を取り戻すことができるだろう。それまでの時間、私たちは共に忍耐によって、「命」を勝ち取らねばならないのである。

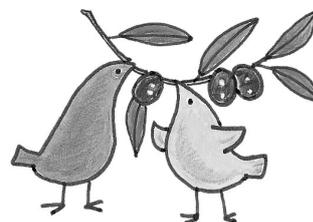
多くの方がご存じのとおり、日本聖公会は、「辺野古への米軍基地建設に反対する声明」を出している。そして、「沖縄週間/沖縄の旅」、「辺野古において座り込みの参加」などの取り組み

がなされている。そのような活動は非常に意味がある。しかし、戦いが10年続いている今、私たち日本聖公会青年は次のステップに踏み出してもいいのではないだろうか。もっと辺野古においての具体的な活動を起こしても良い時となっているのではないだろうか。

私は強く主張したい。辺野古における米軍基地建設阻止活動の勝利は、今すぐ達成されるわけではない。しかし、私たちに神の国が訪れるのと同じように、辺野古にも必ず勝利が訪れる。私たちも共に勝利に向けて祈り、次のステップとなる活動を起こしてもいいのではないだろうか。辺野古基地建設阻止運動に対して、聖公会の青年を派遣できる、援助・支援できる体制、機関が設けられることを願う。それは聖公会青年の育成としても良いものとなるだろう。

主はこう言われる。「忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」(Lk21:19) 私たちは主に遣わされるものであり、そのために青年大会を通して沖縄という地に集まった。これからの聖公会青年の一つの働きとして、辺野古での具体的な働きについて考えていただきたい。恐れることは何もない。常に神は私たちを導いてくださり、「そこにキリストが共にいる」のだから。

H・コンチエルマン『時の中心』より



2. も く じ

1.	巻頭言（実行委員長・松山健作）	1
2.	もくじ	2
3.	大会プログラム（日程表）	3
4.	開会挨拶（実行委員長・松山健作）	4
5.	基調講演（沖縄教区主教・谷昌二）	5
6.	フィールド・トリップ ～渡嘉敷島コース～	9
7.	フィールド・トリップ ～南部コース～	10
8.	セッション②（辺野古について）	18
9.	辺野古訪問プログラム	24
10.	ポストイット作戦	30
11.	各教区分かち合いのまとめ（アクションプラン）	35
12.	閉会礼拝でのお話（実行委員長・松山健作）	55
13.	各教区参加者の感想	57
14.	参加者名簿	66
15.	会計報告	68
16.	ギャラリー	69

3. 大会プログラム（日程表）

■ 8月20日（水）

14:30	受付
16:00	開会礼拝
16:30	オリエンテーション
17:30	夕食
19:00	基調講演
日本聖公会沖縄教区 谷 昌二 主教	
20:45	セッション①
基調講演の分かち合いを中心に、 今大会への期待や沖縄への想いなど をセッショングループごとに話す。	
21:45	コンプリン

■ 8月21日（木）

07:00~09:00	朝食
07:30	朝の祈り
08:00	フィールド・トリップ
渡嘉敷コースと南部コースに別れて出発	
19:30	セッション②
～辺野古について～ 会沢芽美さん「命の海・辺野古から」	
21:30	コンプリン

■ 8月22日（金）

07:00~09:00	朝食
07:30	朝の祈り
08:45	辺野古訪問プログラム
辺野古の海を眺め、辺野古で活動をして いる方々とひとときを過ごし、辺野古を 感じるプログラム。 辺野古で活動をしている方のお話。 昼食はお弁当。 (テント)	
14:30~	辺野古の浜で礼拝。 オブションプログラム
☆じゅごんが見える丘ツアー ☆リボンアクション リボンに想いを書き入れ、辺野古の 浜の有刺鉄線に結ぶ。	
18:00	セッション③
辺野古で過ごした感想を中心に、この 三日間を振り返る。	
19:30	フェアウェル・パーティー
21:30	コンプリン

■ 8月23日（土）

07:00~09:00	朝食
09:00	セッション④
管区・教区ごとにこの大会を振り返り、 これからできることを考える。	
10:00	閉会礼拝（聖餐式）
12:15	那覇空港へバスで出発



4. 開会挨拶

実行委員長 松山健作



みなさん。日本聖公会全国青年大会 in 沖縄にご参加くださり感謝しております。今大会実行委員長を務めさせていただきます。京都教区の松山健作です。よろしくお願い致します。

今回は全国青年大会を始めるにあたり、私の挨拶に変えさせていただいて、みなさんにイメージトレーニングをしていただこうと思います。どうぞ、これから私の話しをすることに耳を傾けていただき、心を落ち着けていただきたいと思います。

これから「心のコップ」というイメージトレーニングをみなさんにさせていただきます。

それではみなさん、まず、目をつぶって心を落ち着かせて下さい。私が「目を開いてください」と言うまで目をつぶっておいてください。それでは最初に、みなさんの心の中にコップを一つ思い描いてください。思い描けたでしょうか。大きくても小さくても構いません。

みなさんが思い描いた、そのコップの中には、たくさんの水が入っています。それは今にもこぼれそうです。その様子を思い描いてください。

どうぞ、みなさん、その水を飲み干してください。しかも、一滴残らず綺麗に飲み干してください。

空っぽになったでしょうか。

今、みなさんの「心のコップ」は空っぽの状態となりました。どうぞ、その空っぽの状態を想像してください。

それでは、「目を開いてください。」

ただいま、みなさんに「心のコップ」の水を飲み干していただきました。この水は何を

意味するものだったのでしょうか。

この水の正体は、今まで人生で経験してきたこと、学んできたこと、歩んできた過程です。みなさんは、これまでに様々なことを体験し、学んでこられたかと思います。私は今みなさんに、「心のコップ」の水を飲み干していただいたことで、一度それらの経験を整理していただきました。リセットしたのではありません。

整理することができたでしょうか。

みなさんは全国青年大会が、この沖縄で開催されるということで多くの準備をしてこられたかもしれません。沖縄のことを事前に学び、青年大会での学びをより広く、より大きなものにしようと考えてここに集まってこられたかもしれません。私もその一人なのです。

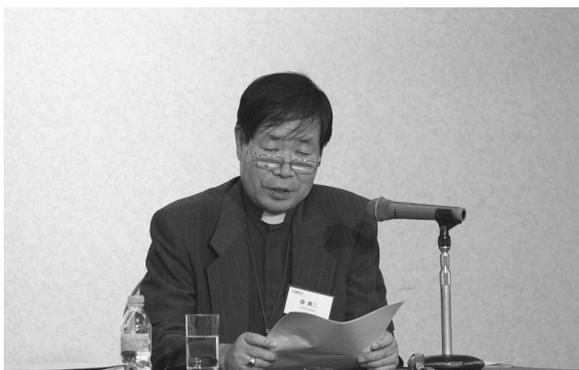
しかし、今このように全国青年大会として140人あまりの方々が集まりました。こういった催しの中で、心新たにし、私たちは純粋に経験すること、学ぶことが大切になってくるのではないのでしょうか。私はそう思います。

ですから、みなさん今、「心のコップ」を空っぽにさせていただきました。その空っぽのコップにみなさんお一人お一人の感性によって3泊4日の間でコップを満たしてください。「心のコップ」の中を溢れんばかりのものにしてほしいのです。

みなさんの豊かな感性で、この沖縄にあるものを、聞いて、目で見て、手で触れて、互いに伝え合っていたきたい。この青年大会で出会う仲間を大切に、共に感動し、驚き、多くの喜びを持って全国青年大会を盛り上げていただきたいと思います。

みなさんと共にこれからの3泊4日を過ごすことができることを感謝し、私の挨拶とさせていただきます。

5. 基調講演



日本聖公会沖縄教区 主教 谷昌二

1. はじめに

韓国からそして、全国各地からもようこそ沖縄においでくださいました。この沖縄に、このようにたくさんの方々が集まって聖公会の青年大会が開催されますことを、共に喜び、感謝します。韓国の皆さんと合同であることも意義深いことです。是非、ここ沖縄で、新しい出会いをし、交流を深め、これからの人生に生かせる大切なものをつかんで帰っていただきたいと思います。

今回のテーマは「そこにキリストは共にいる」ですね。「そこ」とはどこでしょう？キリストが共にいる。キリストは「誰」と共にいるのでしょうか？ この私たちと共にいる。いや、この私と共にいる、ということですが、さて、その私たちはとは、その私とは、どんな私たちか、どんな私か？ これが問題です。

昨年、5月、沖縄で、日本軍の南京大虐殺をテーマにした「地獄の DECEMBRE—哀しみの南京」という朗読劇が上演されました。昨年は、日本が南京に侵略した70周年にあたります。1937年12月、日本軍は南京に軍を進め、攻め落とします。が、一体その時何があったのか？

私は、その朗読劇の台本に目を通したとき、本当に驚き、大きなショックを受けました。どうして、私と同じ日本人が、ここまで残虐になれるのか。ここまで人の幸せを無残にも奪うことができるのか。しばらく呆然としま

した。日本軍は、食料、物資の補給なしに進軍していく、いわゆる現地調達をする訳です。現地のを奪って来いと言うやり方。略奪は当たり前で、抵抗するものは殺される。食料がありませんから、捕虜を養えない。何十万と言う捕虜は全て殺害されました。もっともショックだったのは、女性を手当たり次第に暴行し、そして命まで奪う。その状況が、証言者によって克明に残されています。

胸が締め付けられるような思いでこれらの場面に接しながら、その時、いやこの私もまた、その一人であったかも知れない。戦争の恐怖の中で、何をするかわからない弱い人間。それがこの私である。そう感じたとき、なぜイエスが十字架に自分の命を捧げられたのか、その訳がわかった、何かひらめきのようなものを感じました。まず、何よりも、恐ろしい苦しみにあった被害者のために、イエスもまた苦しんでいてくださる。と同時に、私が見たのは、むしろ、全く理性を失い、良心を失い、獣のように女性に襲い掛かるこの加害者のためにこそ、イエスはその命を捧げてくださっている。どんな人間でも、あるいはここまで陥るかもしれない、この人間のどうしようもない状況を救うために、イエスは、自分の命を十字架に捧げてくださった。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」

「そこにキリストは共にいる」キリストは、苦しめられている被害者の苦しみを共に担いながら、同時に、無謀な加害者のためにも共に苦しみを担って、命を与えようとされている。沖縄の地に立って、どうか被害者の苦しみを担い、同時に、どうしようもない加害者とも共にいてくださるこのイエスに出会ってくだされば幸いです。

話が初めから重くなってすみません。少しリラックスしたいと思います。私は、沖縄に遣わされて10年になります。丁度10年前、非常に良く流行っていた歌で「花」という歌があります。プリントで歌詞を紹介してあります。

「花」 作詞・作曲 歌 喜納昌吉
川は流れて どこどこ行くの
人も流れて どこどこ行くの
そんな流れが つくころには
花として 花として 咲かせてあげたい
泣きなさい 笑いなさい (繰り返し)
いつの日か いつの日か 花をさかそうよ

2. 私の証し

「人も流れてどこどこ行くの」 流れ流れて沖縄に来た私の証を少しお話します。こういって沖縄の人に叱られます。流れ流れて来る所ではなく、沖縄こそここから出かけるところであるというわけです。

私がどうして私が牧師になったのか？ 牧師になるというより、イエスのような生き方をしたい、イエスの生き方にとても引き付けられました。私は3代目のクリスチャンです。高校2年生のとき、身体の調子も悪く、成績もダメで、うつのような状態になって、家に引きこもっていたときに、教会の仲間が青年会のキャンプに引っ張り出してくれました。それがきっかけで、自分から進んで教会に足を運ぶようになりました。そして、このような若い青年仲間、同じ世代の仲間が自由に話し合い、聖書を学び、又、とことん遊んで過ごした経験は、私の人生を変えてくれました。

1961年 安保闘争の次の年大学に進んで、赤軍派のゼミに籍を置いてマルクス経済の勉強も少ししました。マルクス主義を勉強しましたが、その革命論にはどうしてもついていくことができませんでした。歴史を変革していくために、革命を起こし、人の命を奪うことが、本当に人類を救うことになる

は考えられなかったからです。

卒業して、4年間サラリーマンをし、やがて決心して神学校へ進むことにしました。が、家族が猛反対で、随分苦労しました。親の許しを得るまでに約1年かかりました。やっと認められて、京都教区で牧師として働いておりましたが、1998年に沖縄教区主教として、こちらに遣わされて来ました。私の母は、私が牧師になったころから、いつも口癖のようにこう言っていました。「えらくなったらあかんで。主教にだけはなりなや。」

それで、主教に選ばれた報告を受けたとき、随分悩みました。が、主が、私を苦しみの多い、この小さな沖縄に遣わして下さい。私に沖縄を選んでくださった。ここで、イエスと共に、イエスがされたように徹底的に仕える者となる。偉い主教にならないように。こう決断して沖縄にやってきました。

3. 沖縄は最果ての島？それとも……

さて、皆さんが沖縄に来るといとき、どんな感覚で沖縄をとらえておられますか？ 沖縄は、地図の上で、どこか地の果て、ずっとずっと南の果ての島、との感覚がありませんか。私もそうでしたが、それが、しばらくここに住んでいますと、イメージが変わってきます。イメージが逆転します。ちょっと地図を見てください。普通の地図で見ますと、確かに沖縄は、日本の国の南の果てのほんの小さな島です。が、これをひっくり返して見てください。いかがですか？ どのように見えますか？ そうですね、沖縄がこのアジアの中心に位置していることが、見えてきませんか？ 沖縄は、東北アジアの中心、地球のへそという人もいます。昔は海上輸送が交易の中心でしたから、沖縄は素晴らしい立地条件を利用して、本土と中国、又、南の島々との貿易をしながら、琉球王国として、日本本土とは全く異なった独特の豊かな文化を育んできました。

4. 沖縄の苦難の歴史

逆に、この有利な立地条件に目をつけて、沖縄は利用され続けてきたところでもあります。そこに沖縄の苦しみの歴史があります。

1609年に九州の薩摩によって侵略されました。(3000の兵と100艘の船)琉球王国は滅ぼされずにすみましたが、非常に重い税金に苦しめられることとなります。沖縄の人たちは、この屈辱的な侵略を決して忘れていません。今でも薩摩ということばにこだわって、「さつま(薩摩)いも」を、沖縄では決して「さつまいも」とは言いません。中国から来たいもという意味で、「から(唐)いも」と言っています。鹿児島県(薩摩藩)にはいまでもこだわりの残っているのです。

明治になって、1879年に、今度は完全に琉球王国は滅ぼされて、沖縄県として日本の領土の一部に組み込まれることになりました。琉球処分と言われます。そして、徹底的に沖縄人(ウチナンチュウ)を、日本人(ヤマトンチュウ)にするための教育がなされていくのです。沖縄の方言を使わせない、姓名に本土とは違った漢字を用いさせる、天皇制への組み込み・皇民化教育の徹底、教育勅語が真っ先に適用されたのが沖縄です。長い間、貧しい生活に苦しんできた沖縄の人々は、日本人になることによって少しでも楽に生活ができる希望を託して、この日本の植民地政策に従順に応じて行ったのです。日本の最初の植民地政策が、沖縄で成功しました。この沖縄で成功した植民地政策を、今度は、朝鮮の植民地化のためにさらに徹底して実行したのです。日本語の徹底教育、日の丸・君が代、神社参拝強制による皇民化教育、創氏改名(日本名をつけさせる)……

さらに、話は飛びますが、第2次世界大戦の末期、沖縄は本土決戦のための捨石にされました。フィリピンを取り戻した連合軍は、台湾を素通りして、沖縄に全精力を集めました。激しい地上戦の末、沖縄県民15万人の

命が失われました。当時の人口が60万人。県民の4人に一人が亡くなりました。こんな大きな犠牲を払ったにもかかわらず、戦後、沖縄は日本から切り捨てられました。

5. 戦後日本の3点セット

戦後日本の歩みの中で、特に重要なのが、次の三つです。

- ・天皇制を残したこと
- ・憲法9条 戦争放棄
- ・沖縄の本土からの切り離し

アメリカ軍の基地化

こうして沖縄は27年間もアメリカ軍の統治下にありました。1972年、本土復帰が実現しますが、広大なアメリカ軍の基地は全くそのまま、今日に至っています。激しい基地返還闘争があり、面積は徐々に縮小されていますが、その内容は強化され、さらに基地移設と称して、新しい基地建設の計画が強行されようとしています。それが辺野古です。アメリカは決して沖縄を手放そうとはしません。実は、それが日本政府の願いでもあります。たとえ米軍がいなくなっても強力な自衛隊がやってくることは間違いありません。その準備がすでに始まっています。基地としてここが最も有利だからです。

6. 平和と自由の島—沖縄—

沖縄の立地条件の良さが、沖縄の悲劇でもあったわけです。が、ただ、悲劇だけではない。いや悲劇だけで終わらせて欲しくないというのが私たちの強い強い願いです。この立地条件を利用して、沖縄の人々はアジア各地と自由な貿易をし、豊かな人的交流を結んできました。本来、非常に平和な人種であります。命どう宝、命こそ宝。人を殺したり、殺されたりするのが嫌いです。歌が好きです、踊りが大好きです。特に、中国との関係を第一にしてきました。早くから、中国に貢物を納め、逆に中国からは、友好国である証拠と

して、琉球の国王は中国の皇帝が認可する＝冊封の制度をとってきました。沖縄からは、たくさんの貢物を携えて進貢使節が中国へ派遣され、中国からは、琉球の新しい王を認可する冊封使節が沖縄に派遣されて来ました。この交流を通して、貿易が盛んに行われ、又、双方をもてなす文化交流・人的交流も盛んになって、沖縄独自の文化が生まれてきました。

琉球王国は、1429年に統一され、以来、沖縄本島の中では戦争のない島として武器を使わずに過ごしてきた島です。そのお陰で、1609年に薩摩によってあっさりとして侵略されますが、それでも、中国はじめアジア諸国との貿易によって何とか自立の道を行ってきたのです。武装しないで生きて来た島、それが沖縄です。

7. 共に考えてください

武装か？ 非武装か？

さて、ここで皆さんと一緒に考えていただきたいことがあります。それは、本当に非武装が、平和をもたらす道であるのかどうか。皆さんは本当にどう思うか？ イエス様も言われました。「剣をさやに納めなさい。剣を取るものは皆、剣で滅びる。」日本国憲法9条があります。戦争放棄—国際紛争を解決する手段として武力を使わない。そのための軍事力を保持しない。交戦権を認めない。

質問をします。それで近くの人2～3人で話し合っただけです。3分間を与えます。発表する必要はありません。自由に自分の気持ちを語ってください。

テーマは「国を守る方法 軍事によるか 非武装か」です。

質問

- Q1 理想的なものはどちらですか？
A.非武装 B.軍事を受け止める
C.両方の妥協案

- Q2. 現実的なものはどちらですか？
Q3. どちらが攻撃される可能性が大きいですか？
攻撃されたらどちらの方が被害が大きいですか？
Q4. どちらにお金がかかりますか？
Q5. どちらが現実的ですか？
一回しかない人生、どちらにかけて人生を歩みますか？



私の結論：「そこにキリストは共にいる」

私たちが、自分自身の弱さを知って、自分自身の武装解除をして、すべて神にお任せする。キリストはそんな私と、又、私たちと共にいて下さる。十字架のイエスは、常に加害者になってしまう私を、赦し、真の道へと導いてくださっている。そのイエスを共に心に受け入れながら、互いに赦し合い、助け合い、祈り合って生きて行きたいと思います。

(時間があれば紹介します)

2008年 ランベス会議 省察
155.

全聖公会（アングリカン・コミュニオン）は、北東アジアの恒久的な平和の確立の為に韓半島の統一を支持する。そして、この働きを有効に推進するために2007年11月に開催された TOPIK(Toward Peace in Korea)の働きと協働する。

同時に、全聖公会は、北東アジアの平和を維持するために日本の「平和憲法」を守る運動を推進している日本聖公会を積極的に支持する。(日本国憲法9条：戦争放棄を謳った条項、日本政府はそれを変更しようとしている)

6. フィールド・トリップ ～渡嘉敷島コース～

渡嘉敷コース 概要



朝の礼拝後すぐにバスに乗車して泊港へ出発。往路は高速艇で渡嘉敷島へ。台風の影響により航路変更して渡嘉敷島に到着。午前中、吉川嘉勝先生のガイドで3箇所を回る。

- ①国立沖縄青少年交流の家：米軍ホーク基地跡で、交流の家の宿舎等建造物は米軍が立てた宿舎等をそのまま利用している。渡嘉敷島周辺の座間味島、阿嘉島、慶留間島などが一望できる高台にある。1973年より国立沖縄青少年交流の家として開所。



- ②集団自決跡地：1945年3月28日に起こった渡嘉敷島の集団自決跡地で、記念碑が建てられている。米軍上陸後、島民はガマの中で隠れていたが、呼び出されて自決を強要された。集合させられるとき、自決など誰も考えていなかったのではないかと。島民は持てるだけの毛布、服、かつお節などを持って集まり、2、3日すれば軍が何とかしてくれると思っていた。自決時に使用された鎌やのこぎり、かみそり等は、集合場

所の草狩り等生活のために持ってきたものであった。軍属には手榴弾が2個配られていた。1個は敵に投げるため、もう1個は自決するためであった。その手榴弾が自決のときに円を組んで使われたが、不発であったり、または手榴弾がないところは互いに殺しあったりした。集合させられたとき、あたりは狂気という雰囲気呑み込まれた。1日で300人以上が死ぬということはどういうことなのか。また一緒に死ぬはずで自分が殺したが、自分は生き残ったというケースもあり、「こんなはずではなかった」という思いから正気ではいらなかった。吉川先生はいとこの「立って生きるべきだ」という声によって、その場を離れることができた。なぜ、家族を殺すということができたのか。なぜ、いとこは立ち去ることができたのか。答えはそれぞれの中にある。日本軍のいない島では集団自決は起こっていない。



- ③特攻艇秘匿壕：ベニヤ製のボートに爆弾を積んだ特攻艇、俗称マルレを隠していた壕。堅い岩石をくりぬいて建設されているが、建設時に火薬は一切使っておらず、すべて島民の手によるもの。島民は全員が軍の作業に関わっていたので軍の情報を持っていた。そのために軍は島民が捕虜になられ

ては困るため、集団自決が起こった。集団自決は全てのことに於いて繋がりを持っている。

集団自決について、教科書検定問題などで議論が活発化してきているが、「あの教科書は島の苦しみを知っているのか。涙が出る。」と先生は話されていた。



昼食をマリン・ビレッジでとった後、海水浴や公園を散策したり、また帰りまでの時間を「ゆんたく」したりして過ごした。16時にフェリーにて渡嘉敷島を出発し那覇・国際通りへ向かった。

文責：岩佐直人



7. フィールド・トリップ ～南部コース～

南部戦跡コース 概要

8:45 ホテル出発

バス2台に分乗して出発！！

平和ガイド バスA：石原絹子司祭

バスB：大城美代子さん

9:30 佐喜眞美術館

米軍普天間基地の一部を返還させた場所に建つ美術館。テーマは「生と死」「苦悩と救済」「戦争と人間」。

歴史的事実や沖縄戦を徹底的に研究し、生き残った人々と共に現場に立ち、その証言をもとに丸木位里・俊夫妻によって詳細に描かれた「沖縄戦の図」。その前で、細部にまで込められた作者の思いや平和への願いを聞いた。その後屋上で美術館に隣接し、住宅密集地の中にある沖縄県内最大の普天間基地を眺めながら「暮らしの場が基地になった沖縄の現実」や、基地が及ぼす危険と

隣り合わせに生きる沖縄の現状についてなどの話しを聞いた。



11:30 糸数壕 アブチラガマ



沖縄本島南部の玉城村糸数にある自然洞穴。全長 270m。

1945 年 2 月から 4 月までは日本軍（通称：美田連隊）が複数の兵舎を作るなどし、陣地壕とした。5 月ごろより約 1 ヶ月間は沖縄陸軍病院の糸数分院として使用され、軍医や看護婦、衛生兵、ひめゆり学徒らが配属された。傷病兵が次々と運び込まれると、壕内の兵舎は患者で埋まり、薬剤がなく麻酔なしの手術や、けがの手当てといっても傷口のウジを取り除くだけなど、治療らしいことはできなかった。6 月 3 日、軍司令部の南部への撤退の方針に従い、歩ける患者は別の壕に向かわせ、歩けない患者には青酸カリが渡され置き去りにされた。分院撤退以降、食料を監視する数人の日本兵と重症患者 150 人、住民約 200 人が残った。壕から出た住民でそこに食料があることを知っていた人が食料を取りに入ろうとし、日本兵により殺害されたこともあった。米軍による攻撃により住民たちは次々と死亡していったが、ガマ内は「ガマから投降すれば斬る」と宣言していた日本兵に支配され、住民も米軍に捕まったら無残な殺され方をすると信じていたため、ガマから出られなかった。しかし 8 月 22 日、度重なる地元住民の投降の呼びかけに住民約 100 人が投降した。その後もガマに残っていた日本兵が最後に投降したのは 9 月に入ってからだった。

壕内に入り、暗闇の中で話しを聞きながら懐中電灯の灯りを頼りに、病室やかまど等当時の生活の跡を見て回った。全ての灯りを消し当時の人々に思いを寄せて、祈りを捧げるときをもつことができた。

12:50 昼食 食堂：でいご

チャンプルー定食

ひめゆりの塔近く。食後にひめゆりの塔を見学することもできた。



14:00 平和祈念公園

韓国慰霊の塔

1975 年 8 月韓国から運ばれた石を使用して、自国の戦争のために亡くなった人々の為に建てられた他の塔や祈念碑などとは場所を離れた土地に建立された。手前には朝鮮半島の方角を指す矢印がはめ込まれている。

当時、沖縄にも多数の朝鮮半島出身者が強制連行され、飛行場建設などの過酷な労働や従軍慰安婦として使役された。県内には 130 ヶ所以上の慰安所があり、慰安婦は 1000 人以上、軍夫は 1 万人以上いたとみられるが、どのようにして連れてこられ、生き延びて帰ることができたのかも分かっていない。平和の礎には朝鮮半島の出身者は 433 人（2008 年 1 月現在）しか刻まれていない。沖縄に強制的に連れてこられ、無関係な戦争に巻き込まれ亡くなってい

た朝鮮半島出身者の存在についてはこれまでほとんど記録されていない。

塔の前で、沖縄戦で犠牲となった全ての人々、自分の意思とは関係なく戦争という罪悪のもとで犠牲となった人々、日本人・米国人・朝鮮人そして沖縄の人々を覚えて、韓国・日本の参加者の代表がつくった祈りを捧げた。(以下抜粋)



<代表祈祷>

この世界を平和な姿に創造された神さま。空と地そして海が、美しく、バランスよく整えられているこの地、沖縄で、わたしたち青年も一つとならせてくださることを感謝します。しかし、この土地で想像を絶する殺し合いの歴史があったということを知りました。戦争に動員された兵士たちの心は、私たちの想像をはるかに超えます。

戦争で犠牲となった民間人とその家族の方々の悲しみも、私たちは本当に理解できません。特に、他国に連れてこられ、強制的に働かされ、犠牲となった朝鮮の人たちの痛みを、わたしたちはいくら理解しようとしても、理解しきることはできません。しかし、この一つだけのことだけはよく知っています。このような痛みと悲しみは、二度と繰り返されてはならないということです。

愛と平和の神さま。今、この地から、和解と赦しと平和の業が広がっていきますように導いてください。未来の主人公である青年たちを通して現わされる奇跡を通して平和

が変われますように。韓国と日本の関係が変わり、東アジアが変わり、戦争が起っているすべてのところが違って全世界に神さまの平和の力が満ちあふれますように。

イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン



<韓国人慰霊の塔碑文>

1941年太平洋戦争が勃発するや多くの韓国人青年達は日本の強制的徴募により大陸や南洋の各戦線に配置された。この沖縄の地にも徴兵、徴用として動員された1万余名があらゆる艱難を強いられたあげく、あるいは戦死、あるいは虐殺されるなど惜しくも犠牲になった。祖国に帰り得ざる魂は、波高きこの地の虚空にさまよいながら雨になって降り風となって吹くだろう。

この孤独な靈魂を慰めるべく、われわれは全韓民族の名においてこの塔を建て謹んで英靈の冥福を祈る。

願わくば安らかに眠られよ 1975年8月
韓国人慰霊塔建立委員会

平和の礎

1995年完成。同6月23日に除幕された。

「いしじ」=「いしずえ」。20数万人の命を「礎～いしずえ～」として、その上に揺るがぬ平和を築こうという誓いを込めてつくられた。



沖縄戦の最後、アメリカ軍の砲火によって人々が追いつめられた断崖—アメリカ軍は「Suicide cliff (自殺の断崖)」と名づけ、地元の人々は「ギーザバンタ」と呼ぶ—

「平和の火」を起点に波型の御影石の刻銘碑が放射線状に何重にも立ち並び、国をこえ、敵・味方をこえ、また軍人と住民、加害者と被害者の別なく沖縄戦において命を落としたすべての人の名が刻まれている。2008年1月現在で刻銘者数は240,609人（沖縄県149,091人、他府県出身76,961人、米軍14,008人、大韓民国351人、朝鮮民主主義人民共和国82人、英軍82人、台湾34人、地上戦開始前も含む）。このうち沖縄県出身者だけは、沖縄戦は単発で起こったのではなく満州事変から始まるひとつながりの十五年戦争の帰結として引き起こされたという考えから、十五年戦争を通しての戦没者の名が刻まれている。全戦没者を刻銘するために、今でも新しく分かった戦没者の名前が毎年刻まれている。

沖縄県の刻銘碑には、「〇〇の子」や「〇〇

の長女」など名前不明の刻銘がある。それは一家・一族の全てが沖縄戦において全滅してしまい、また軍部の方針で、米国によって沖縄が占領されることを見越し、その際に混乱をきたす為に戸籍などの公の書類を破棄してしまったため、名前が分からないままになってしまった人々のものだ。民間人の4人に1人が亡くなったといわれる沖縄戦、その壮絶さと当時の日本が沖縄を捨石とした様を現わしていると思える。

平和祈念資料館（見学は自由）

1975年海洋博覧会にあわせて建設されたが、老朽化がすすみ手狭になったため2000年に現在の資料館が開館した。旧資料館の展示面積の数倍の大きさとなった展示場は、沖縄戦だけではなく米軍に統治された沖縄の戦後史を1972年の施設権返還まで展示している。旧～新資料館と生まれ変わる過程において監修委員会が検討して決定した展示について、当局の幹部が日本軍の加害性を薄めるために勝手に展示内容の変更を指示したことが発覚。県内では激しい怒りの声が渦巻き県議会においても厳しい追及が続いたため、当時の稲嶺知事が展示については監修委員に一任するという見解を示し、変更されていた展示は元に戻された。

沖縄戦を住民の視点で伝えるためにたえず議論の場となり、住民の視点からみた沖縄戦の実相伝えるために努力が続けられ、現在の形となったといえる。



展示資料の中には生々しい死体の写真や住民の証言を集めた部屋があり、沖縄戦が、戦争というもの私たちの想像をはるかに超えて残酷で悲惨なものであるのだと感じた。また、戦後の沖縄の生活の展示は、悲しみや苦しみを背負いつつも生き抜いてきた沖縄の人々の力強さを感じさせるものだ。

15:30 分かち合い 於、平和祈念ホール
朝から一日佐喜眞美術館から平和祈念公園まで過ごして見聞きし、感じたこと、考えたことなどをそれぞれのセッショングループに分かれて分かち合った。



17:15 国際通りにて解散

担当者の感想

まる一日、酷暑の中100名程というたくさん仲間と共に沖縄の様々な地を訪れることができ、大変貴重な体験ができたと感じている。

米軍が上陸をはじめた宜野湾の海（佐喜眞美術館の屋上から見た海）を眺めてから南に下って行くという今回の行程は、かつて戦時下の沖縄の人々がたどった道をなぞるかたちとなった。私たちはバスでその道を行ったのだが、当時の人々はもちろん足で壮絶な道を歩いた。みんなでその距離を感じたかった。沖縄戦はもっと雨の多い季節だった。私たちが体験したよりも、もっと蒸し暑い時だったと想像する。

今回は韓国からの参加があったおかげで韓国慰霊の塔に足を留め、祈りを捧げるときをもつことができた。韓国の仲間と共にいた

おかげで、韓国の慰霊の塔について、当時沖縄に強制的に連れて来られていた朝鮮の人々のことを知ることができた。そして韓国の仲間から思いを聞くことができ、共に感じ、まだまだ私の想像を超えた現実があったのだと、実感した。

仲間と訪れるということは、それぞれが感じたことを、思いを分かち合うことができるということであり、新たな視点を与えられる機会なのだ、とあらためて気づいた。今回の経験によって、また私は新たな「沖縄」「戦争」「平和」に出会った。

新たな出会いを与えてくれた、共に旅した仲間へ感謝したい。そして、この機会を与えてくれた全ての人、時、そして神さまに感謝。

文責：谷景子



フィールド・トリップの感想

『南部戦跡フィールドトリップ』

松山律子

この2日目のプログラムでは、観光では触れる事のできないものに、触れる事ができた。今回私は、沖縄の『裏側』を見てきたのだ。沖縄と言えば、多くの自然、景色といったイメージがある。しかし、それは沖縄のたった一面にしかすぎないということを知った。

私は今まで沖縄に何度か訪れた事があるけれど、その一面しか見ずに帰ってしまっていた。これは、私だけでなく、他の人もそうだと思う。観光地を巡って、沖縄の一面だけを味わって帰るという感じである。このキレイな地で戦争が起こったことなど、思い浮かべるのは難しい。

今回のプログラムを通して、実際に南部戦で使用されていた『ガマ(洞窟)』、爆撃後の映像や人間の写真、集団自決の時に使用された刃物など、戦争に関するものをたくさん見学した。その中でも1番印象的だったのが、『ガマ』である。暗いし、ひんやりするし、ここで様々な惨劇(幼児虐殺、集団死の強要、スパイ容疑による住民虐殺..etc)が繰り広げられていたことを想像すると、ぞっとして早く『ガマ』から出たくなった。そんな環境の中、ここで何ヶ月も住むことを考えると、「そら頭も狂うわ」と思った。このような惨劇の歴史が、そのガマの中で起こるということは、戦争というものが、人間らしさを奪っていくのだということを強く感じる。

お国のためと嘘で固めた本音で、家族が家族の命を奪い合う。そんなことが存在しているのだろうかと思ってしまう。沖縄に訪れて初めて、本当にここで戦争が起こったということを実感し、戦争の生々しさを感じた。そして、もう二度と戦争を繰り返してはいけないと強く感じた。

小さい頃、教科書や本で、広島や長崎が燃



え尽きた写真などをよく見たことを思い出す。もう二度とないはずだと思っていたけれど、60年以上たったというのに、ある国では、まだ火をふく戦車、空は連日連夜燃えているのが現実なのだ。今このときも、罪なき子どもがじっと身を寄せて頑張っている。そして、この沖縄の地でも、まだ米軍基地などの問題と戦っているのだ。非武装は理想的なのかもしれない。しかし、それを現実になんか近づけていく事が、平和を願うものにとっての使命なのではないか。

『平和は与えられるものではない。求めるもの。求めないとやっこない。平和は勝ち取るもの』ということ、このプログラムを

通して学んだ。この沖縄で学んだことを、受け身とするのではなく、発信していく事が重要なのだと思う。

南部戦跡フィールド・トリップに参加して

佐藤真理

沖縄戦について、話や本を通じて少し知っていた程度だったけれども、今回初めて沖縄戦跡を訪ね、お話をうかがう機会をいただくことができた。

・佐喜眞美術館

住宅街の中にある普天間基地。その普天間基地に突き出た形で佐喜眞美術館は建てられている。

そこには丸木位里・丸木俊の「沖縄戦の図」が常設展示されている。展示室正面いっぱい広がる大きな作品。沖縄戦で生き残った人たちの証言を聞き描かれた、とうかがった。集団自決、殺された女性、骸骨の山、逃げ隠れる人たち、凄惨な場面が描かれていて、3人の子ども以外の人たちの目には瞳が描き入れられていない。沖縄戦を体験された人たちの深い苦しみが、静かだけれど、物を言わないけれど、全身に訴えかけてくる。

「沖縄戦の図」を観た後、佐喜眞美術館の屋上に上らせてもらった。そこからは、すぐ真下に広がる普天間基地を眺めることができる。沖縄の基地からイラクやアフガンへ米軍が派遣されている、沖縄は今も戦争中の状態に置かれているのだ、とガイドの方がお話ししてくださった。沖縄戦から離れて急に現在に戻ったようにその時は感じたけれども、戦争という暴力に沖縄はずっとさらされ続けていることを改めて知らされたのだと今思う。沖縄戦の図と佐喜眞美術館の存在が表している戦争の酷さと平和への願いが重く響く。

・糸数壕 アブチラガマ

全長 270 メートルもある大きな洞窟で、は



じめ住民の避難壕だったようだが、後に日本軍の陣地壕、日本軍倉庫、野戦病院としても使われ、ひめゆり学徒隊も活動していた。

住民の方達が避難してきた時の明るさの追体験ということで、ガマの中で参加者全員が懐中電灯を消した。外からもれてくる光はなく真っ暗になった。だんだんと目が慣れて周りが見える、ということは全くない。隣の人も何も見えない。そのような中で住民の方達はどのように生活していたのだろうか。次に、病院として使われていた時の明るさの追体験として、ガイドの方が一つだけ懐中電灯の明かりを手で覆いながら天井に向けた。薄ぼんやりと周りが見えるようになったが、誰が隣にいるのか、何があるのかははっきりわからない。手術をするような治療室ではもっと明かりを集めていたとのことだが、このような状況でよく医療活動ができたな、と思う。

ここには慰安所も設けられ慰安婦が連れてこられていたようだ。どれだけの多くの人がどのようにし、どのような思いでいたのか。病院の撤退命令が軍司令部から出された時、日本軍は自ら動けない患者に青酸カリを渡して置き去りにした、とか、避難住民が米軍に投降しようとする日本兵から斬ると脅された、また米軍にひどいことをされるといふ日本軍の説明を信じて住民はなかなか投降できなかった、という話をうかがった。日本軍や日本兵が、人や命を大事にすることよりも、軍という組織や兵士という自分を優先させたこと、戦争の恐怖で人はまともに考え

られなくなってしまうこと、そしてもし自分もその場にいたならそうなりそうだと感じ、恐ろしいと思った。

・韓国人慰霊の塔

沖縄にも、朝鮮半島から1万余名の方達が強制連行され、男性は軍夫に、女性は慰安婦とされていたことを初めて知った。この韓国人慰霊の塔は、半球の形に石が積み上げられていて、それらは韓国の方々の出身を表す意味で韓国各州から運ばれたとうかがった。名前も分からない多くの人たちが強制的に連れてこられ犠牲になったことを申し訳なく思う。

・平和の礎 へいわのいしじ

国籍、軍人と住民、加害者と被害者を分けることなく沖縄戦で亡くなったすべての人の名前を刻もうという方針で波形の碑が放射状にいくつも建てられている。

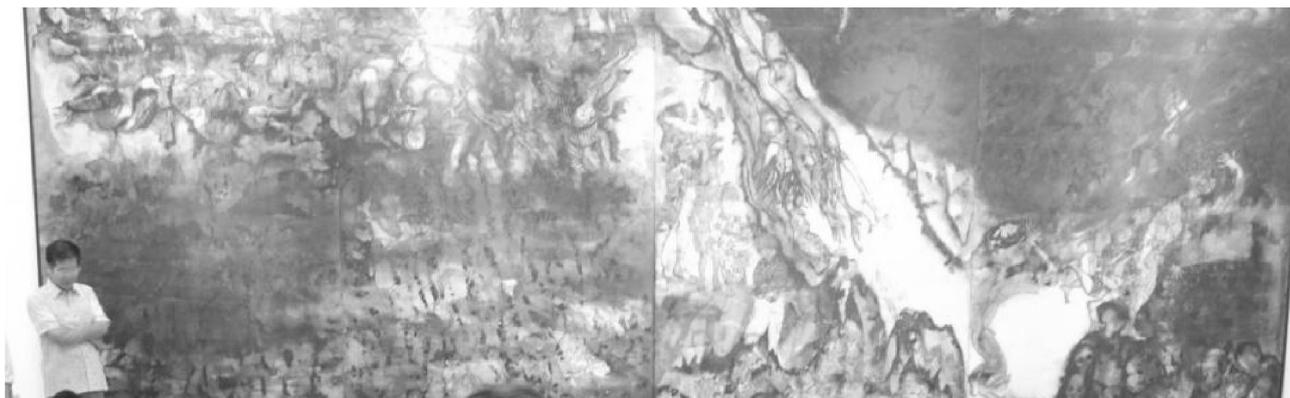
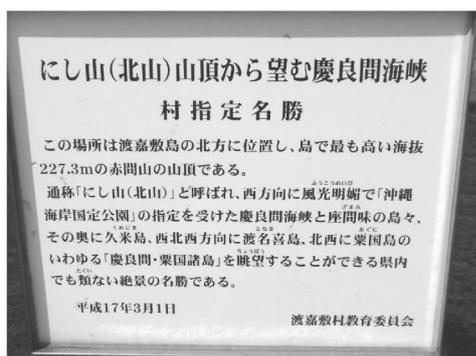
碑の中には、だれその長女、という形で刻まれているものがあった。当時の住民記録がなくなっていたりして小さい子どもなど名前が分からなくなってしまう方がいたため、歴史から消えてしまわないようにと、残られた住民の方達の記憶をもとに刻ん

でいる、とうかがった。ひとりひとりの命を大切に、その犠牲を忘れずに平和を作ろうとしている思いを感じる。ただ、朝鮮半島出身者の方の名前が433名しか刻まれていないのはなぜだろうと思う。平和を築いていくにはどうすればいいのか。

・沖縄平和祈念資料館

亡くなった子どもの写真などを見ると、もうこんな事はあってはいけなく強く思う。日本兵が銃剣をかまえていて、その脇で母親が泣く赤ちゃんの口を必死に手で押さえている情景を表した人形があったが、これを見ると兵士や国は何のために戦っていたのだろうかと思う。

南部戦跡をめぐって、日本が沖縄にいた人たちに大きな犠牲を強いたこと、また今も多くの基地の存在によって強いていることを申し訳なく思う。今まで沖縄戦や戦争のことについて、自分の生活とは離れたところにあるもの、というような感覚があった。このフィールド・トリップを通して私たちに語られ、訴えかけられたことに対して、自分はいかにどのようにしていくのか考えていきたい。



8. セッション② (辺野古について)

「命の海・辺野古から」会沢 芽美 (あいざわ めみ) さん：独唱・一人芝居



《プロフィール》

「今、自分に出来ることで沖縄からの平和のメッセージを伝えることは、沖縄に移り住んで沖縄の痛みを知った者の責務です」そう言いきり年に百回以上に渡るコンサートや演奏活動をこなし、日本中を駆け回っている“沖縄在住の道産子歌手”日本うたごえ祭典（東京開催）に於いて、沖縄戦の中の母子の姿を捉えた作品が初めての創作賞及び歌唱賞を同時受賞するなど、その心に染み入る作品には定評がある。また1998年沖縄県読谷村に開設した文化と平和の宿「うたごえペンションまーみなー」のオーナー&シェフとしても、多忙な毎日を送っている。

*北海道小樽市出身、宮城学院女子大学音楽科卒、1974年沖縄移住

*CD等「沖縄の白い道の上で」「嘉手納より」「太陽の子どもたちⅠ・Ⅱ」「空よ海よ風よ」「ウーヅぬ花」(ブックレット付)

【琉球舞踏踊り手】

金城 麻美 (きんじょう あさみ) さん

浦添市在住。沖縄県立芸大卒。宮城流教師・琉球古典芸能コンクール最高賞保持者。

新里 春加 (しんざと はるか) さん

那覇市在住。沖縄県立芸大卒。宮城流教師・琉球古典芸能コンクール最高賞保持者。

踊り：「四ツ竹」

頭に花笠、琉球の紅型衣装に身を包み、両手にもった竹を鳴らし鳴らし踊ります。数多くの踊りの中でも最も沖縄らしい雰囲気醸し出します。

歌：「サトウキビ畑」

1. ざわわ ざわわ ざわわ 広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ 風が通り抜けるだけ
今日も見渡す限りに緑の波がうねる 夏の日
差しの中で

ざわわ ざわわ ざわわ 広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ 風が通り抜けるだけ

2. ざわわ ざわわ ざわわ 広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ 風が通り抜けるだけ
あの日海の向こうから戦がやってきた 夏の日
差しの中で

3. ざわわ ざわわ ざわわ 広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ 風が通り抜けるだけ
あの日鉄の雨に打たれ父は死んでいった 夏の日
差しの中で

ざわわ ざわわ ざわわ 広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ 風が通り抜けるだけ

歌：「赤田首里殿内」

沖縄の昔からの子守歌

あかたすんどらんち くがにどうるーさぎてい
うりがあかがりば みるくうんけ

歌：「芭蕉布」

- 1 海の青さに空の青
南の風に緑葉の 芭蕉は情けに手を招く
常夏の国 我した島ウチナー
- 2 今は昔の首里天じゃなし
唐を紡ぎ機を織り 上納奉げた芭蕉布
麻地紺地の 我しや島ウチナー

踊り：「谷茶前ぬ浜」

村の浜に魚がおしよせた。それを村人総出です
くいに行きます。男達は櫓を漕ぎ、女達は魚をか
ごに、頭にませ踊ります。豊かで平和な漁村の光
景をひと組の男女が踊ります。

一人語り：『命の海の話』

作詞・作曲・脚本／会沢芽美

ジュゴン…沖縄では神の使い「ザン」と呼
ばれ親しまれている彼ら。絶滅種として危惧
され、世界的に保護が叫ばれているジュゴ
ン。その彼らが住む北限の地が沖縄近海の海
です。ここに危険な普天間基地を移設する
ことが決まったのは今から10年前。自然豊か
なその辺野古の海ではそれ以来、地元のおジ
ー、オバーを中心に、海を守るため・命を守
るための座り込みがねばり強く続けられて
います。ここで登場するのは「基地でお金が
入る」と、基地賛成だったお母さんです。沖
縄の人達の、ある面 本音が見えます。が、
ある日、海を守る人々の命がけの姿を見てし
まったお母さんは…

次代を担う若い世代に、「沖縄からは日本
の未来が見える」…そんな沖縄の『今』を皆
さんにお伝えます。

…今辺野古から…

二見美童や だんじゅ肝美らしゃ
海山ぬ眺め 余所にまさていヨ

この民謡は、これからお話しするお母さん
が生まれた二見と言うところの歌です。この
歌の通り、娘たちは心優しく美しく、海も山
も、他のどこよりもきれいなところって言わ
れてたのですよ。

この海で育ち、結婚して可愛い子どもたち
にも恵まれました。

天からぬ恵 受きてくぬ世間に
生まれたる産子 我身むい育てい
イラヨーヘイ イラヨーホイ
イラヨー愛し思産子
泣ちなよやヘイヨーヘイヨー
太陽ぬ光受きてい
ゆいりヨーやヘイヨーヘイヨー
勝さあてい給り

1956年、辺野古の崎にキャンプシュワ
ープという米軍基地ができました。山も弾薬
庫と演習場にされて、演習は昼も夜もおかま
いなし。

あんまり爆音がひどいもんだから、学校の
天井にひび入った。

キャンプシュワープは海兵隊の基地でね。
海兵隊ってのは戦争が起これば 世界中ど
こにでも 真っ先に飛んでいかされるのさ。
だけど基地が出来てから辺野古の町は賑わ
ったよ。アメリカ兵相手の飲食店ね。明日は
ベトナムの最前線に送られる兵隊たちがワ
ンサカ繰り出して、持ってるだけのお金を全
部ばらまいて 朝まで遊んだ。

ドルね、これがレジに納めきれないで溢れ
てさ。一斗缶…、これくらいの、そう 今な
ら石油ポリタンクぐらい？そのくらいの大
きな空き缶にどンドン突っ込んで、それでも
入れきれなかったって、お金が！

こんな辺野古の町も今ではすっかりさび
れてね、うん？アメリカ兵が基地の外に出な
くなったからさ。でも、豊かな海があったか
ら…この海のおかげでみんな飢え死にしな
いで、子どもたち育ててくれた…。

タンポポ (2コーラス)

作詞・狩俣繁久 補詞・小森香子 作曲・大西進

1. 金網の向こうに小さな春をつくってる

タンポポ

金網の外にも小さな春をつくってる

タンポポ

光色のタンポポは

金網があっても金網がなくても

沖縄中に春をふりまいたでしょう

2. デモ隊の足元に光の花を咲かそうと

タンポポ

米兵に踏まれても

それでも花を咲かそうと

タンポポ

強く生き抜くタンポポを

金網の無い平和な緑の沖縄に

みんなの願いを込めて

咲かせてやりたい

みんなの願いを込めて

咲かせてやりたい

そんな命の海に、今から10年前、新しい基地作るって話が起きたのです。

最初は、ヘリ基地って言うから「ヘリポートみたいな簡単なものかねえ」そう話してたんだけど、あの危険な普天間基地がここに移されるって言うから、大変。

長さ1500メートル幅500メートル。珊瑚の浅瀬を埋め立てる予定…と。えー！そんな大きいの聞いてないよー！沖縄中が大騒ぎになりました。

それに、あの海にはジュゴンが住んでいるのです。ジュゴン…わかるでしょう？世界中で数が減ってしまって、守らなきゃならないあの子たちが、毎日エサ食べに来るのです。ここに基地造ったら、あの子たちは生きていけない！

「そんなことさせないぞ」って、みんなが立ち上がりました。

でも、「基地造っても良いヨー」って言う人もいるし。

「じゃあ どうしたらいいか投票で決めましょう」

って訳で翌年12月 市民投票をやりました。その結果は圧倒的に《戦争のためには陸も海も使わせないんだよー》って言った方が勝った

…なのに 計画は進む。なんで？

基地造る代わりにこの地域に沢山お金を出しますよ、立派な建物を造りましょう、仕事も沢山増やしてあげましょう。この地域が発展しますよ。

そうやってきたわけさー。アー…大人の中にはそういうことに弱い人もいるのですよ。ウン、このお母さんもその一人でした。いつも思ってたそうです。

「那覇とか あのあたりに住んでる方が良いなあってね。何で…仕事もあるし 良い学校に子どもたち行かせられる…このあたりなんか大した産業もないし貧乏だし…誰だって上等な暮らししたいでしょう？」ってね。

それに大きな基地が出来れば、また昔みたいに 町も賑わうんじゃないかねーってね。そう考えたんですって。

ところで、いつの間にかこの海上基地 浅瀬からリーフへ、大きさも幅500メートルが700長さ1500が2500メートルに変えられていました。

反対運動してるオジー・オーバーは 辺野古の海のそばに小屋を立てて 来る日も来る日も海を守ってた。八年間もよ。

あの沖縄戦を生き抜いてきたお年寄りたち…

「もしジュゴンが住むこの命の海に、人殺しの基地が造られるようなことがあったら、この身を海に投げ出しても絶対止めてみせる」

そうっては朝から晩まで座り続けてたのです。

彼女はそれを遠くから眺めてました。

沖縄中から 日本中から 沢山の人が 小屋に応援にやってきた。

「がんばってください」「一緒にがんばりましょうね」

二〇〇〇四年四月一九日

いよいよ工事が始まるという知らせで沢山の人が集まって来ました。

そして海のすぐそばにテント小屋立てて座り込みを始めたのです。

若い人たちも集まって来て ますます増えてきました。

だけど 何でえ、国が決めたことなんだから仕方ないさ、反対したってしょうがないさ…と、そうお母さんは考えてたそうです。

焼けるような夏も、嵐の日も、冷たい北風が吹く日も 黙々と座り続けてる人たちを…。ただ見てたのです。遠くから。

ここからは、彼女がはなしてくれたことです。

ある日海を見たら 大きな船がやってきました。で その周りに何か、点みたいなのが見えるのね。よく見たらそれは何艘かの小さなカヌー。

ビルみたいな船に… 今にも飲み込まれそう。

あ！アブナイ！思わず叫んでました。

翌日からリーフの所には櫓が次々建てられた。全部で六三カ所建ててるって聞いてます。ああいよいよ始まるんだ…

え？だけど 四つ造ってから全然進みません。

父ちゃんに頼んでね、船出してもらって、リーフの所まで様子見に行ったんだよ。あの人たちは？海の上に出た柱にしがみついている。波まともにかぶって

必死にしがみついている。あの櫓にも…あ…あそこにも…。

リーフっていうのは、珊瑚礁のへりが急に深くなってる危険なところだね。

落ちたら、場合によっては命に関わるのですよ。

国の作業船が来た。あ 櫓の人の足引っ張

ってる。大丈夫かなあ。

カヌーが応援に集まってきた。

その日以来、家にも落ち着かないんですよ…

どうしても気になって、迷ったけど 初めて テント小屋まで行きました。カヌー隊は今日も 朝早くから櫓に行ってるようです。

港から作業船が出て行った。

しばらくしたらテント小屋のスピーカーから声が聞こえてきました。

へえ！ トランシーバーで連絡取り合ってるんだ。

「こちら第一ポイントです。作業船が近づいてきてます。どうぞ」

「了解、慎重に対応してください。どうぞ」

「わかりました。がんばります」

しばらくしたら突然「あ 止めてください。足引っ張らないでください。あぶないです」

「あんたらも同じ沖縄の人間じゃないか。乱暴は止めてください！」

「あ あぶない！落ちる 落ちる！あぶない。やめてください」

「あぶないーい！」

その声にオバアが 浜辺に飛び出したんですよ

「あいえなー、戦ぬ苦しみ60年たちん、癒さらんむん。くぬウチナーや、なまちきてい 戦場どうやんな！」

……戦争が終わって60年経ったっていうのに、この沖縄はまだ戦場なのでしょうか。

（ほほを涙が伝っていました。拭っても拭っても 次から次へと。目の前の青い海が 涙でぼやけて…ぼやけて…。

We're not Your TARGET!

作詞・作曲 会沢 芽美

守るといふのなら 何を守る？

この青いふるさとと命を守れ…

ぼうや母さんをしっかり見て欲しい

踏まれても連れ去られても

座りつづける母さんを…

ぼうや母さんをハッキリ見て欲しい
あなたのその命守り続ける母さんを
ぼうや当たり前のことなんだよ
平和な毎日を誰もが欲しいと思うから
ぼうや父さんもその又父さんも
昔から生きてきた命の海だから
守るといふのなら 何を守る？
この青いふるさとと命を守れ…

今、このお母さんは毎日テントの中に座っています。

沖縄から基地無くして下さいって、そんな難しいこと言ってるのかしらね。本土の人達と同じように、何時でも何処でも自由に歩きたい、子どもたちが安心してお使いや学校に行けるようにさせてあげたい、そんな、当たり前の生活がしたいって言うだけでしょ？

なんで？沖縄なら我慢しなさい？

「あんたたち何千キロも離れた小さな島に住んでるんだから、あんたたちは我慢しておきなさい？50年我慢できたんだから、これからもだいじょうぶでしょう？」冗談じゃあない。

私たちだってここで生きてる、私たちだってここで子ども生んで育てて…

みんなのお母さんと同じでしょう？この子どもたちに、この海この空この島、いったいどんな形で手渡せばいいわけ？

今、沖縄でやっていた実弾射撃演習を日本中にばら撒いてるって知ってる？北海道から九州の果てまで あっちこっちに。沖縄でやってたのをそのまま、いやここでやってたより もっとずっと大きな演習やってるって聞いてね。私たちは確かに 沖縄から基地無くなったらいいね…とは願ってるよ。

でも、本土に持って行ってとは誰も言っていない、

沖縄に要らないものは日本中何処にだって要らない、これがウチナンチュ、これが沖縄の心さー。

そうそう この手紙…

兵庫県に住んでる小学生からもらった手紙
これ読んだら、私の話はお仕舞いにしましょ
うね

おしえて…せんせい（2コーラス）

1. 僕の街に基地があったら
ぜったいイヤヤ
君の街に基地があったら
やっぱイヤヤロ？…
おしえてせんせい
ぼくはちゃんと仲良くするよ
大人になるとなんでこんななるん？
せんせい何で米軍基地が沖縄にあるん？
何で基地が何時までたっても
無くなれへんのや？
おしえてせんせい
ぼくはきっと仲良くするよ
大人になると何でこんななるん？
例え一人が語っても正しいことは
正しいんや
一万人が言っても間違ってることは
間違ってる
正しいことを正しいといえるのが
本当に平和を愛する人だと先生は思う
おしえてせんせい
ぼくはきっと仲良くするよ
大人になると何でこんななるん？

全員合唱 韓国の歌「朝露」・「花」

踊り「黒島口説」、かちゃーしー
五穀豊穡を感謝し、幸せを祈った踊りです。



《担当者感想》

沖縄の文化と平和を共有することができる舞台をと、会沢芽美さんが台本をおこして下さり、今回の辺野古セッションが実現しました。

3日目に訪れた辺野古の今まで地元で起こった葛藤、現場での闘いをどう参加者に伝えようかと考えていた時、歌と一人芝居で平和を訴えられている会沢芽美さんの「命の海、辺野古から」という作品を知り、お願いすることができました。

琉球舞踊の明るい色彩の衣装とエネルギーあふれる声で会場が一段と明るさを増していました。そして一人芝居ではそこに住むお母さんの目線、口調で地元がゆれる現状が語られます。一言で普天間基地の移設先にあがっている場所、と辺野古を位置づけることは簡単ですが、そこに住んでらっしゃる地域の方には、生活がかかっており、ヘリポートができるということは戦闘機が離発着を繰り返すということ、争いなどいらぬのに賛成派と反対派に分かれてしまい、親族や近所

が今までのような付き合いができなくなるということ・・・。

ぐいぐい引き込まれ、語り口のお母さんを通し、現場の痛みがひしひしと伝わってくる台詞やお芝居でした。韓国からの参加者の方々には伝わりにくかったところもあるとは思いますが、演者から染み出る、現場で海を守ろうとしている方々の悲痛な思いが少しでも伝わったならばと願っています。

韓国の歌「朝露」を日本語と韓国語で歌い、次第に大合唱になり参加者が一つになっている感じがしましたし、最後は全員で沖縄のかちゃーしーを踊って盛り上がり、会を終えました。芽美さんから「言葉には言い表せない温かい心に包まれたようなそんな中で幸せに仕事をする事が出来たこと…心から感謝します。」とメッセージを頂きました。

素晴らしい歌と一人芝居で沖縄、平和を伝える活動をされている芽美さん、琉球舞踊で楽しませて頂いた金城さんと新里さんにあらためて感謝をお伝えしたいと思います。



9. 辺野古訪問プログラム

2008年日本聖公会全国青年大会2日目プログラム 辺野古訪問の報告書



文責：東北教区仙台聖フランシス教会
クリスティーナ 影山 愛

はじめに

丘の上から海の中が見える、海底が見える、という海が、日本の海の中にどれほどあるのかを、私は知りません。ですが、そのように美しい海を、私は沖縄の地で生まれて初めて目にすることができました。

ことに辺野古の海は人の手が加わることなく、本当に自然な姿でそこにあります。あの海を目にした時、その美しさに心奪われない人がいるなんて、私には到底考えられることではないのですが、少なくとも、目の前の美しい景色を前に「この景色は近日中に無くなります」と言われ、驚き、うろたえない人はいないと思うのです。ましてや、その理由として「米軍の施設をつくるために」と聞き、「まあ、それなら仕方がないですね」と納得する人など、いるはずがないと思っています。

今回の青年大会における主題は「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について」という聖書の一節でした。以下、私が辺野古で聞き、目で見て、手で触れた命の言について、拙い文章で綴らせて頂きます。

思わせぶりな名前の丘で

青年大会3日目の朝、参加者全員が大型バス3台に乗り込み、辺野古へ向かいました。定員制ではあったものの、希望者は、辺野古崎北側に広がる大浦湾のお隣の湾を望む「ジュゴンの見える丘」へのちょっとしたバスツアーに参加することが出来たため、私は辺野古のテント村へ行く前に、そのツアーに参加しました。

「ジュゴンの見える丘」というネーミングに、期待度100%!人魚のモデルとされ、国際的保護動物となっているジュゴンに会える!?と、胸躍らせてバスに揺られていた私でしたが、その場所に着いて最初にガイドの東恩納さんから知らされたのは、その場所からジュゴンが見られる機会のごく稀だという衝撃の事実でした…。確かに人間の目線で考えると、その場所はジュゴンを観察するには絶好のロケーションではあるけれども、ジュゴンにとっては必ずしも心地の良い環境ではないのだとのことでした。

とはいえ、ジュゴンが、餌である海草を食べにやって来ることが稀にあるというその湾の景色は、海面がエメラルドグリーンに輝

き、さんご礁の浅い海底がくっきりと見え、素は珊瑚であるという真っ白な砂浜があり、思わずため息が漏れるほどの美しい自然美でした。

米軍施設の建設から辺野古の海を守ろうという活動は、主に「環境」と「平和」の2つの側面からのアプローチがなされているということで、ここでは特に環境面から見た辺野古の保護の必要性について具体的なお話を伺いました。

大浦湾の一角である辺野古崎に巨大なヘリポートが建設されると、その付近一帯の、珊瑚をはじめとする動植物に多様な悪影響が及び懸念があり、ひいては生態系そのものを崩壊の危機に晒すことにつながることで、そしてなんととってもジュゴン絶滅させる方向へ追い込んでしまうこと、が最大の問題であると理解しました。

沖縄で現認されているジュゴンの数はおよそ50頭といわれており、絶滅危惧種に認定されています。ということは、ジュゴンを絶滅させない為、日本は国を挙げて万策を尽くし、保護しなければならないはずで、ところが、日本政府はそれとは正反対の辺野古崎を埋め立ててジュゴンの餌場を奪う施策、すなわち貴重な生息域を奪ってジュゴンを根絶やしにする施策を推し進めようとしているのです。これは、一般通常人には全くもって理解不能の異常事態なのですが、それが環境面における辺野古の現実です。

更に、国際的な視点からすると、辺野古の異常事態が浮き彫りになることも教えていただきました。

まず、ジュゴンの生息域が存在すると確認されている国の中で、ジュゴンの保護区域を指定していないのはおそらく日本だけだと

いうこと。确实なのは、先進国の中では唯一であるとのこと。

そしてなにより、辺野古の海を埋め立てて建設しようとしている施設の使用主は米軍ですが、その米国において提起された沖縄ジュゴン訴訟では、サンフランシスコ連邦地裁が、米国防総省が建設計画を進めることを違法とし、建設によるジュゴンなどの生態系への正しい影響調査を命じたというのです。

辺野古の海について「環境」という側面から考える時、日本政府の方針は、理解に苦しむなどというレベルではなく、摩訶不思議としか言いようがありません。

中でも、「ジュゴンの見える丘」で私にとって最も痛烈に響いたのは、やや不正確な記憶ではありますが、「皆さんはこの後それぞれの地に帰りますが、帰って終わり、もう知らない、では済まされません。ここに来てこの海を見て知ってしまったのですから、もうこの海はあなたの海でもあるのです。自分のこととしてこの海のことを考えてください。」という東恩納さんの言葉でした。



いざ、我ら辺野古へ！出で行かん

思わせぶりな名前のプチバスツアーを終え、辺野古のテント村に到着するとすぐに、テントの日陰の中で、潮風を全身に浴びつつ、手作り感たっぷりの美味しいお弁当をいただきました。



時間的余裕がさほどなかったため、黙々とお弁当を平らげると、テント村の代表をされている方と、カヌー隊を率いていらっしゃる金井牧師様が、辺野古が置かれている現状や活動の実態、活動に携わる人々の想いなどについてお話をしてくださいました。

第二次世界大戦で、沖縄は日本国内では唯一の地上戦が繰り広げられたため、田畑はもちろん、地上のものは皆焼き尽くされて一面焼け野原と化してしまっただけで、豊かな海があったから、海のものを食べることで沖縄の人々は命を繋ぐことが出来たのだそうです。だから、地元のオジーやオバー達は辺野古の海を、自らの命だといって、必死で守ろうとしているのだということをお話してくださいました。

また、ここで米軍の基地建設を反対する人達は、辺野古に建設されることを望まないだけでなく、世界中のどこにも建設されないことを望んで活動しているということ、それはすなわち戦争のない平和な世界を望むということであり、そのために、絶対的な非暴力を守っているということでした。それは、どんなささいなものであっても、暴力は必ず戦争につながるという考えに基づくもので、現に、作業船



でやってくる人達に殴られたり蹴られたりしても、絶対にやり返したりはしないそうです。それは正に「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」という聖書の教えの実行であるとおっしゃっていました。

これをききながら私がしてしまったのは、この世において神様の御心に従うということは、肉体的にも精神的にも辛いものであって、簡単に、すばらしい、喜びであるとはとても言えないなあ…ということでした。

お話を聴いた後、浜辺で、各マリボンメッセージアクションを行ったのですが、そこで目にしたのは、真っ白な砂浜には余りにも不釣り合いな鉄条網と、そこに結びつけられた、無数の布切れでした。その鉄条網は米軍基地との境に設置してあるもので、不定期的に米兵が「no base」などと書かれた布切れ達を取り払っていくそうです。しかも、過去には、取り払うのではなく、焼き払われたこともあったということでした。平和への強い願いが込められたその布切れ達にアブラをかけ、火を放った米兵はその時何を考え、どんな気持ちであったのだろうか、切ない気持ちでいっぱいになりました。ただ、もしかしたら彼らもまた、心を痛めていたのでは？と思うこともありました。それは、ある時水陸両用車でやってきた米兵に、カヌー隊が「Go home!!」と叫んだのに対し、米兵が「I want go home!」と叫び返してきたというのです。

生活のために、本当は嫌だと思いつつも日本政府に雇われてやってくる作業船に乗った人々も、家に帰りたいたいと思いつつも異国の地で兵隊として働く米兵も、自分の思うままに行動することができないのは何

故なのか、不思議で仕方がありませんでした。しかし、一方では、逆に考えれば、平和実現が全く不可能ではないことをも、示唆しているようにも思えました。



その後、砂浜で全員が渦巻状の輪になって、お礼拝をお捧げしたのですが、なぜか私は汗と涙と鼻水にまみれたお礼拝になってしまいました。その理由は、式文に書かれていた祈りの言葉が、自分の想いを代弁しているとか、完全に自分の言葉として発することが出来た、ということもありましたが、もう一つはオジーの叫びにも似た語りのためでした。

茹だるような暑さの中、86歳のオジーは、車椅子に乗って、私達に演説のように話をして下さいました。オジーは、戦争に行ったことを「自分は人殺しの現場に行ってきた」と言い、罪滅ぼしと思って、平和実現を心から願い、辺野古の海を守る活動をしているとおっしゃいました。そして、その自らの行動が「間違っていますか？」と、私達に、また神様に対して問うていらっしゃいました。そのようなオジーの話を聴いていると、自分でも説明のつかない涙があふれてきました。

そして更に、オジーが、私達のことを「天の御遣い」とまでおっしゃって、私達が辺野古を訪れたことに対して、爆発するような喜

びをあらわにして下さったのには、恐縮する思いもありましたが、嬉しい驚きでもありました。

しかしながら、なぜあんなにも後から後から涙が出てきたのか、今でもこれといった理由が見当たりません。少なくとも、悲しかったからではないし、嬉し涙とも異なるのは確かで、自分の感情によって流れ出た涙ではなかったのかな、と感じます。もしかすると、適切な表現かは分かりませんが、オジーの命の言が、私の魂に直接揺さぶりをかけたのではないかと考えています。

沖縄が今年の青年大会の開催地として選ばれたのは、「命の言」について語り合い、考え合うためでした。大会を終えた今、辺野古の浜辺でオジーが叫んだ命の言に涙をこらえきれなかった私には、神様によって100名を超える日韓の青年達が辺野古に集められ、神様によって「命の言に出会わされた」ことが、今大会の最大の目的だったのではないかと、そう思えてなりません。



おわりに

私が辺野古を知ったのはちょうど1年前、2007年夏のこと。友人の結婚式で沖縄教区の神崎直子姉と出会い、辺野古に魅せられて東京から沖縄へ移り住んでしまったという直子姉の話に、興味を示さないでいられるはずがなく、初めて会ったというのに、宿泊先のホテルの部屋で、夜中まで話を聴かせてもらったのでした。そこで、地元のオジーやオバー達に加え、全国もしくは国外から、それぞれの信念や思想に基づき、様々な人達が辺野古の海を守る為に活動していることを聴き、辺野古に強い関心を持つようになりました。それからほどなくして、2006年にテレビで放送された「海に座る」という番組を録画したDVDを借り、辺野古への「興味」「関心」から、辺野古に「関わりたい」というように、気持ちがシフトしました。

というのも、美しいからというだけではなく、辺野古の海を自らの「命」であるといい、様々な犠牲を払って命の海を守ろうとしている地元のオジーやオバー達の言葉、また、作業船がやって来ると、機材にしがみつき、正に体を張って作業を阻止するダイバー達の姿に、胸をえぐられるような衝撃を受けたからでした。

また、辺野古の海を埋め立てて、米軍の普天間基地を移設する計画を是が非でも実行しようとする日本政府の役人方には、どうしてオジーやオバーの言葉が届かないのか、何故、自らの命を危険に晒してまで基地建設に反対する人々の心が理解できないのだろうか、もはや歯痒さや憤りすら通り越し、哀しくて仕方がありませんでした。基地建設に反対している人々の主張はどれも理路整然としているし、至って単純明快です。同じ国

の人間で、同じ言葉を話すことが出来る者同士なのに、神様、どうして彼らは分かり合えないのですか？と繰り返し思いました。40分足らずの番組にもかかわらず、観ている間に3回もボロボロと泣いてしまう程でした。

それからずっと、柴本司祭様から送信していただいている「へのこのこ通信」を読みつつ、辺野古に行きたいと願い続け、同時に、私が、辺野古の海を守る為に出来ることは何であろうか、基地建設反対を訴える人達に加勢するにはどうしたらよいのかを考え続けていました。

今回の辺野古訪問は、私にとっての悲願が叶ったといっても過言ではありません。しかし他方で、今こうしている間にも、辺野古のテント村では座り込みが続き、多くの人々が闘い続けていることを知ってしまったことで、スタートラインに立ったとも言えます。ですから、私の願いのほんの導入部は神様に聞き入れられたのかもしれませんが、私の願いの本体部分である、辺野古の海が真に危機を脱却するということが、神様によって聞き入れられるよう、祈り続け、そして自分出来ることを見出して行動しなければなりません。

最後に、ひよんなことで辺野古を知ってから、たったの1年後、まさかその場に自分がいようとは、さすがに想定外(笑)の出来事でした。ですから、今回の辺野古訪問は、自分が神様によって生かされているのだということ、改めて思い知らされる機会ともなりましたことを、付け加えさせていただきます。

以上



青年大会での辺野古訪問について 沖繩教区 並里 翔

沖繩での青年大会3日目のプログラムに辺野古訪問があった。2日目のアプチガマ同様に沖繩出身であるのにもかかわらず初めて行く場所であった。那覇から離れた名護へのこという場所に普天間基地が移設される予定である、という事実は知っていたけれど、実際に見に行くのは初めてだったために個人的には一番楽しみにしていたプログラムだった。

バスにゆられて辺野古につき、強い日差しの下20分ほどかけて歩いてたどり着いた「ジュゴンが見える丘」は沖繩に住んでいた自分にとっても初めて見るような美しい海岸だった。風は涼しく、海底がはっきりと見えるほど澄んだ遠浅の海は見ただけで幸せな気分させてくれるようだった。もちろん美しい海だから、という理由だけではないけれど、そこに残っている自然を壊してまで、海岸を埋め立ててまで基地を作ってしまうのかと思うと疑問を感じ

ずにはいられなかった。かといって普天間にある基地をそのまま残したり、沖繩もしくは日本の別の場所に移す、というのもおかしい、と思ったので自分の中で基地についての考えはうまくまとまらなかった。

「ジュゴンが見える丘」だけでなく、砂浜での礼拝、座り込み運動をされている方や嘉陽のおじいの話もとても貴重な体験だったと思う。米軍の所有する土地との境目にある有刺鉄線は白い砂浜の上にくるぐると円を描きながら敷かれていて不気味なものに感じただけれど、それでも辺野古を訪れただけであんなに喜んでくれた嘉陽のおじいを見ていると心を打たれた。

辺野古を訪れることはそう何度もできることではないけれど、沖繩に生まれた者として基地のあることを「あたりまえ」とせずには辺野古で感じたことを辺野古の実情をあまり知らない人に伝えることが自分にもできることではないか、と感じた。貴重な体験をさせてくださった青年大会の実行委員の皆さんありがとうございました。



10. ポストイット作戦

大会中、ポストイットで自分の思いを伝えありました。

僕は教師になり、
今日で学んだことを
生徒達におくる。

夢をかなえたものは
夢を諦めたものは
8/22 RITSUKO

Sea
is
Life
Onishi

사랑을 사랑하는 것,
나와 당신과 그들 모두를
평화롭게 하는 것
NO WAY

オジサマ言ったまうに
おれは神のみが
いっわ!!
アキラカワ!!

きれいな海を見に
また来るけん!

大いに感じて、目の場、状況で
できる最大の働きができるよう
努める「感働カ」 齋藤 徹

ばりきれいな海、
まだまだ見たいばい、
巻地はいらんばい!!

沖縄にこれて
学んだことを
広めていきたい。

沖縄の地で平和を願うたいと深
思ふ
この美しい、静かな海。に平和を望む。
静かな日々。
平和にはもてこのおぼがある。
もとも平和をうたえたいは持てあるの
みんなとのおもが他にどこにあつたかな。

心のコップに
溜まった命の
言葉を伝えます。み

初参加して、初めて沖縄に来て
沖縄の事を少しは歴史を勉強し
ました。自分の目で見るので又すごい
と思いました
また来たいです。 広根

沖縄の人たちの思いに
ふれて感じたことを忘れず
何をしていくのか考え何か
あることがぞきれおと
思います。 せうまり

ジュゴンの見える方を見た
海がきれいだった。
ここで出会った人々の想
を持ち帰り
地元でがんばりたい!お

無関心ではいけないことを
学びました。
これから関心を持ちつけ、
学校にいる子どもたちに伝えて
いきたいです。
また誰かをつれて
来ます!! 北野 恵

타이 한테 가서
누가?
↳
↳ who?
가하는 유해하다

実際、見る事で、
感じる事ができました!
見て、感じて、話して、
と!! “軍隊がいらないとい
ふこと”

まずは「知る」こと。
知ろうとする、こと。
現場に入ること。
自分が加害者であるというコ
と自覚すること。 萩野

お互いの違いを認めあい、
共にして平和な世界に
いこえほ

この3日間はとてもいい経験
になった。いつもの生活に戻って
意識がうすれていくのはこわ
いけれど自分にできることを探
していった。 並里 翔

たくさん出会えてよかったです。
人、思い、言葉、行動、この4日間の
出会いを自分のフィールドで表現し
ていきます!
愛、勇気、たたくさんお伝えした。
ありがとうに感じました。 解衣

싸우지 않고 친하게
살아요

美しい島を守りたい。

単身者が211人
に変わるように

生命と絆
水を奪うものはいりません。
一人では守れません。
仲間と笑って乗り越えよう

너희들은
あんたたちは
하느님으로부터 축복받은
神さまより祝福されて
이름이야
いるものたちだよ
Henoko おじいより 할아미자

小さい輪から
大きい輪へ
平和の輪を広げよう!
野間美鈴

沖縄のことをもっと知って、
いつの日か平和に貢献するときに
果ればいいなと思います。
高井謙一郎

まずは
友達に伝えよう

平和の意味、
ムズかしい。。。
松倉圭佑

私にできることは小さい
ことがかもしれないけど、と
あえずこの経験をも人に
伝えることだと思います☆
カネマユイ

小さな事から
コツコツと...
そして省々平和に♡

世界平和
-李恩知-

体験してきたことは光輝いています
が。
その光を外に出していきたい

基地は
無い方が
お互いのため! 上原 成和

세계 정복과
진정한 평화를
위해서 그리고
내 고향을 위해서

もっと知りたいと
思った。
きれいな海や自然を
守ってきたい。

Peace & HOPE
우리는 오끼나와
를 지켜주고
8월이 있다. Hong. S.H

本質に必要と物
なにか、平和は必要
最小限で存在するのは
Love is more

沖縄 最高でした。
みんなありがとう
(^^)

ここは沖縄で韓日の青年の、主に
ある信仰を一つにして集いを持つた
ことは 神の国実現に向っての大きな
一歩の信仰です。主に感謝!!

オジの話を聞き、頭がな
心で感じることを知ることができた。
軍艦=武力を無くすという
おじの話を聞き、頭がな
心で感じることを知ることができた。
軍艦=武力を無くすという
おじの話を聞き、頭がな
心で感じることを知ることができた。
軍艦=武力を無くすという

へのこでの祈り拜と (おろかみ 1111)
おじいの話に涙!!
祈りはまっとう勝利(ませま)を
もたらす!!
とりあえず大阪に帰たら
「沖縄の会・大阪」を結成するぞ!!

ひとりの意識から
みんなの意識へ
「平和祈原真」

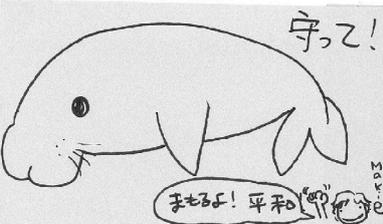
祈り → 行動 → 学ぶ
CHANG the World
2008. 8/2
西千知子

基地はどこにも
いりませんから。
(天)

本物と出会う!!
憲法9条を
守りぬく!! (しん)

平和かい、イイト。
成田敬寛

加藤
非暴力!!
キリストの孝女エズ、あたりまえの事だから
実行は難しい。
アメリカ軍基地反対のみならず、
自分もかみばってやるのよ。
遠い所で応援してあげてあげて下さい



自分の内 かな平和。
愛の地球 地球の
自分を 愛しなさい!

平和は
生き方なのだ。

祈りは
行動と共にある!

うあべでなく
本当にリスクを
背負って。

いつも平和を実践
する 私で いたい。

세상에 전쟁이 없�고
하늘이에서 영원한 평화가 깃들기를
기원합니다.
2008. 08. 22.

이 땅에서 더 이상 슬픔이라는
단어가 사라지고 앞으로는 희망과
사랑이 넘치는 오기나라가 되길
주 예수님의 이름으로 기도 합니다.
08.08.22 Yoon.S.D

당신은 사랑받기
위해 태어난
사람. ~ .

主により頼み
平和の道具 となろう
いきたい
いっしょ

何せ 辺野古に基地をつくるのだから
何せ 日本に米軍基地があるのだから
安保は必要のだから?
どうしたら基地はつくらないのだから?
宿題をたくさんもらいました。

この海は大切な
大切な海. 命も自然も
大切なものは シカプル
なもの. 人の手で壊さず
服部

☆海を守りたい!! ☆
そのために もっといろん
な事を見て、言周べて
伝えらるようになる☆

「現場」に来たつもり
だったけど、実は
もうすでに僕●は
現場に立っていた。
山田

一致を
地球を基調にする国際平和
を構築する
平和な世界を
つくる
平和な世界を
つくる
平和な世界を
つくる

辺野古の人々のおむい
私たちのおむいか。
主にとどきますように
西田

また 二の沖繩に来たい!!
自分の生活するところでも
私に出きる働きをしたい!!
沖繩の海・沖繩に生きる人たちの
命がどうか守られますように...

温故知新
だと思ふ。

普通の旅行では経験でき
ないようなことが多かった。
少しずつ他の友達に伝えて
いきにいと思う。

평화로운
세계를
위하여
“우리 하나 되어” 남시다♡
SARA☆ We are the one
705.8.27

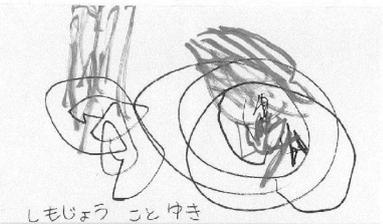
どんな小石でも
流はたつ。その波は
いつか陸にたどり着く
3/21 柳澤

いとりが 出会うと!
ひとつからはじまること!
2008. 8. 21.

平和のために
我が意を届くす!

沖縄の人に
主の平和がほしいです
お祈りにします。
大田裕吾

平和を伝える
おばあに
つみたて。



しもじょう ことゆき

相変わらず
ゆるい

産地本という意味と。
あの海の珊瑚を
守りたい。火合うたを
守りたい。 평화의
뜻이다.

實際に合って話を聴く。
お字ぶねは違うから 勘前も
強感し。

次、沖縄に来るときも
キレイな空と、キレイな
海が見たいなあ。

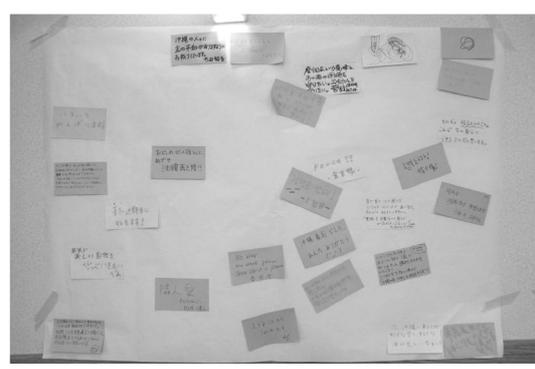
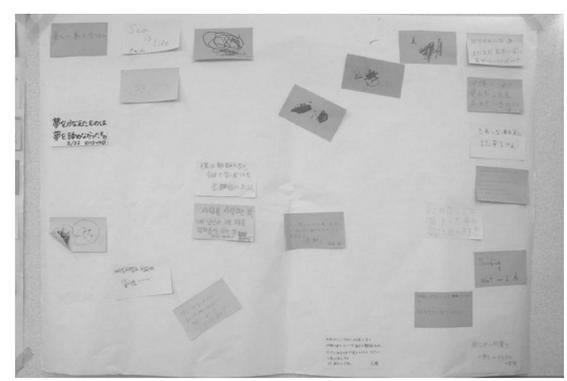
바다로 가자!!
海に行こう!
辺野古で会おう!!
의사의 만나다!!

とにかく 伝えていくこと
これが今の自分に
できることだと思います。

産地こみ = 非暴力
= 無力 = イスの
十字架

Peace !!!
- 金世琴 -

행복행자!
徐小僖!

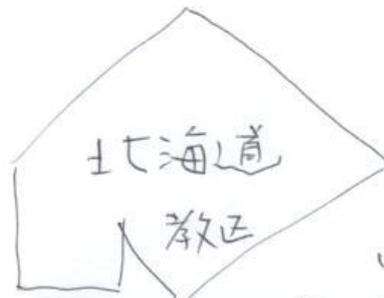


1.1. 各教区分かち合いのまとめ

(アクションプラン)

- 人数のガマの中で 暗闇の中で 灯りを消して五感を感
らねない中で 祈ったとき、イエスキリストと一緒にいてくらし
まがした ^{今まで} 一番気持ちが入った。
- おじいのお話を聞いて、命を大切にすることに信じて
いることを知り、キリストが共にいると思えた。
- 教会に行けてよいことで クリスマスとしてどうはんたろうと
思っていたけれど 沖縄に集らなくて おじいのお話を聞いて、
みんな一緒に礼拝して 心が一致したことで 悩みが
よくつた気がした。

- 沖縄の人に会ったり
話を聞いて、日本の
中で、このように状況
にあるのを知って、
物事の本質に触れる
ことができた。自分で
何かしなければ、と思った。



大野世、伊藤涼、
成田敬忠、松崎幸信、
藤井三知、土町寛人、
下里昌、植高果乃子、
伊藤河帆、上田ちほ
考案

- 沖縄に来て
実際に海を見て
おじいのお話を聞いて
今まで実物を見て
いなかった。漠然と平和が
大事だと感じていたけれど、
今回強く受けとめるこ
ができた。

- 真実を知ることの大切さを
知った。
真実を知ることは大変で
時に苦痛のいいように
情報が採られてしまう
から、これはいかに
実感した。

- キリスト教員に対する考えがみんな異なり
あり、これを打ち合わせしていったけれど、
参加していくうちに、壁が再び打ち
壊された感じが、急にとても楽しく
過ごすことができたように感じた。
- 弱く小さくても、辺野高の人たちと
共にキリストが働いていることを感じ
それを、実際に日々取り組んで
いても意義があったと思う。

青年達の交わりが
 一番大切だとりうことを
 この泊4日で感じました。
 特に辺野古でオジマたちがいたこと
 が印象に残っています。
 最後に、よき交わりができたことに神に
 感謝します。 太田 裕吾

辺野古のおじいさんの
 言はいのちの／＼と
 でした。
 キリストは辺野古に
 来られて下さったように
 思っています。 越山 哲也

言

「百聞は一見に如かず」
 という言葉を実感できました。日曜でした。
 沖繩で見たヒトとヒト、出会った人から
 受けた衝撃を忘れずには
 これからの自分の考え方を生かす
 見つけていきたいです。

信念をもって勇気ある
 一歩を踏み出し魂の会話を。
 連携と一致を大切に。

東北教区

- ・ 全国青年大会を通して、青年同士が時間や想いを分かち合うことの素晴らしさを感じた。
教区内の青年たちの交わりの機会をつくらせていきたい。
- ・ 沖縄の海の美しさ感動した。
その海が壊されることを真剣に阻止しようとしている方々の想いに触れ、その思い「生き様」を教区の方々に伝えたい。
- ・ 現在に至るまで、戦争で受けた傷が癒やされずに過ごしている方々のために祈りたい。

東京教区、まとめ

⑥ みんなの聞いた「命の言」

- ・ 知らず知らず関わらないといけな。知らず知らず関わっている。
- ・ 非暴力で！ とにかく「守る」ということ。
- ・ 健康でいること。小さなことから何かにつなげる。
- ・ 命について真剣に考えている人は 小さな小さなことにも「ありがとう」という感謝の気持ちで忘れないうこと。
- ・ 明日はない。今日がすべて。「命」の次の世代をつくる。
- ・ 座りねえを今のこどもたちが大人になるまで続けさせるつもりか!? 本当は早く終わらせないといけな場所なんだということ。
- ・ 絶対暴力には許さな。暴力に暴力を返しても 平和は作り出せな。心と心を繋ぐ!
- ・ 平和は生き方なんだということ。排除ではなくつなげる生き方。
- ・ 自分たちが見て聞いて触れたものはすべて「命の言」だった。「命の言」として全体を振り返ることからする。
- ・ 吉川さんが自分の「生きた感覚」を伝えてくれたこと → だから私たちにもリアルに。命を伝えて伝えようとしてくれる人がいる。

⑦ 今後

- ・ まわは自分の場に帰っていきな。 「命の言」を忘れな。自分の立場としていきなことをする。他の人にどう伝えるかという役割をどう果たすか。
- ・ 沖縄の日常はどうしても止るべきな。常に来てる心を新たに!
- ・ 命を大切にする。平和を實現できる生き方を身近なところを實現!
- ・ 身近な人にどう語るか... 一番難しい。少しづつ共有する。時間をかける、常につなげてゆくことから。

9/23の教区フェスイベント。30分間音楽祭でアコースティック
[9/28 下町合同研修会での報告会

決定!!

上田 結女
(うへだ ゆい)

原 穂希世子
(はらほきよ)

大阪
教区

2.あつまる。

青年たち個人が問題意識を
持つだけでなく、「皆」の問題として
持つために、青年の組織など
を作って活動する。

高木謙一郎

1.知らせる。

教区礼拝のときなど、皆で学んだ
こと、経験したことを
報告する。伝える。

4.連鎖。

沖縄だけの問題ではない。
大阪のホームレスなどの問題も、
あがて連鎖の中で起ってくる。
「遠い」ことだけでなく「私たちの
問題」という認識を、忘れない。

岡崎 希美
(おさき のぞみ)

3.学ぶ。

常に被害者と加害者など
両側の意見としっかり学び、
両側からの見方があるという
ことを忘れてはいけない。
そのために、学ぶ。

5.つながり。

今回沖縄と持てたつながりを
持ちつづけ、リアルな意見を知ることの
できる環境が必要ではないか。
そのような「現場とのつながり」を
保つことがとても大切。

中村 明
(なかむら あき)

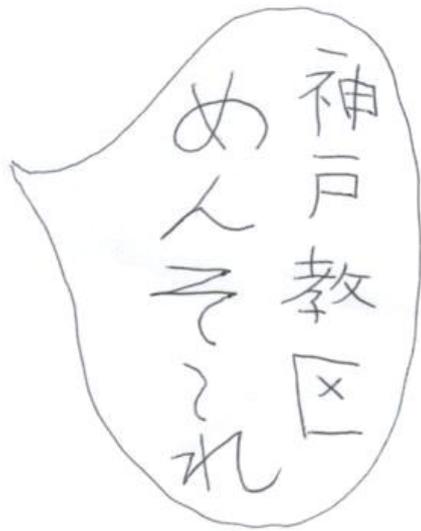
2008. イムてびん
全国青年大会

村上 恵依子 (むらかみ けいこ)

真子 義人
manako yoshihito

金 姫貞 金山 由依
荻野 直人

保倉 拓人
盧 承勳



杉野 達也

ホー-12 Kun-21
☺

司教



與野田光嗣

執事 村 朱衣

尾瀬愛理

野間美怜

脇阪亜紀

九州教区の

これから

... まずは
~それぞれの感想~

集団自決が行われた
場所に立ってみてなんと
言えない
気持ちに
なった。

小さな
ことから
コツコツ
と

私たちには話を聞いた
責任がある!!!

感極まる

まだ実感がわかない...
でも行動しなければ!
と思った。

温故知新
古きをたれ新しきを知る

自分がいかに考えて
いないかがわかった。
一つ一つのことに
対して自分の考えを
出さなきゃいけない。

おじいの実顔が
印象的
孫のおにかわいって♡

.....として。

辺野古や平和に対してのメンバーションを
高めるために、1ヶ月に1回、2ヶ月に1回
でもいいから みんなで集まり、沖縄だけ
ではなく、世界の平和を考えたい!

... というコトになりました☆

九州教区の

これから

... まずは
～それぞれの感想～

集田自決が行われた
場所に立ってみてなんと
言えない
気持ちに
なった。

小さな
ことから
コツコツ
と

私たちには話を聞いた
責任がある!!!

感極まる

未だ実感はわからない...
でも行動しなければ!
と思った。

温故知新
古きをたれ新しきを知る

自分がいかに考えて
いけないかがわかった。
一つ一つのことに
対して自分の考えを
出さなきゃいけない。

おじいの実顔が
印象的☆
孫のおにかわいって♡

..... として。

辺野古や平和に対してのモブバージョンを
高めるために、1ヶ月に1回、2ヶ月に1回
でもいいから みんなで集まり、沖縄だけ
でなく、世界の平和を考えたい!

... というコトになりました☆

九州教区の

これから☆

... まずは
~とれどれの感想~

集団自決が行われた
場所に立ちみてなんと
言えない
気持ちに
なった。

小さな
ことから
コツコツ
と

私たちには話を聞いた
責任がある!!!

感極まる

まだ実感がおかない...
でも行動しなければ!
と思った。

温故知新
古きをたれ新しきを知る

自分がいかに考え
ていないかがわかった。
一つ一つのことに
対して自分の考えを
出さなきゃいけない。

おじいのお顔が
印象的☆
孫のおにかわい...って♡

..... として。

辺野古や平和に対してのモチベーションを
高めるために、1ヶ月に1回、2ヶ月に1回
でもいいから みんなで集まり、沖縄だけ
でなく、世界の平和を考えたい!

... というコトになりました☆

沖繩教区

広める

まずは沖繩の中で
広める



風化させない

現状にマヒしない

↑ ↓ CHANGING ↓ ↑

違う視点で
もう一度みる

沖繩の中では見えないもの
を他の視点を通して再確認
する。

実際に現場へ行く

自分の目で見て、肌で
感じるものが真実

続ける

思い続ける
見続ける
感じ続ける
やり続ける
祈り続ける...

MEMO

- 주명 - 일본에 처음었는데 마냥 새롭고 즐거웠다.
- 소희 - 생각보다 일본인과의 교류가 적었다. 아쉬웠다.
- 민영 - 일정이 너무 바빴다.
- 광조 - 통역이 부족해 의사전달을 다하지 못했다.
불편함을 느꼈다. 한일간의 교류가 부족했다.
- 은지 - 강의내용이 계속 비슷해 조금 지루했다.
- 의정 - 토론분위기가 아니라 강사된 위주여서 아쉬웠다.
교류가 부족했다.
열정적인 오케나타 볼을 많이 만나서 좋았다.
- 혜석 - 좋았다.
- 예슬 - 일본인과의 교류가 부족했다. 일정이 너무 힘들었다.
- 성호 - 우리나라 예제로 참전대회가 ~~좋은~~ 열렸으면 좋겠다.
한일참전대회는 자주 열리게 교류가 많았으면 좋겠다.
- 상준 - 이야기가 증폭되는 부분이 많았다.
하지만 오케나타에 대해 자세히 알게 되기 같다.
일정이 조금만 여유로웠으면... 교류가 부족
- 하용 - 일정에 치여 힘들었다. 처음 참가했는지 조금 벅찬 강을 느꼈다.

MEMO

승 - 주제족의 많은 배려를 느낄 수 있었다. 감사하다.

교류가 잘 이루어졌다. ~~내~~ 나눔족 (동영이 부족해 교류. 나눔이 부족)

자원 - 세션시간이 부족. 서로서로소통시간이 부족해 아쉬웠다.

사라 - 프로그램에서 경험 많이 좋았다.

모기나타기 대해 많이 알 수 있는 기회였어. 동영이 부족해 이야기시간이 (교류 부족)

미경 - 작년과는 많이 다른 시간들이었다. 경험하고 싶은 느낄 수 있는 시간이

많아 좋았다. 일정이 너무 막자 정도 힘들었지만. 많은 것 알 수 있는

시간이었다. 일반인들의 교류가 부족했다. (너무 짧은 시간이었다.)

앞으로의 방향

사제모임을 많이 가져 캠프가 시작하기 전에도 교류가 많았으면

좋겠다. 토론할 시간이 많았으면 좋겠다.

캠프후에도 계속해서 한일간의 교류가 있었으면 좋겠다.

☉

東北教区（景山愛）

～今後についての雑感～

1. 戦争と平和、そして辺野古について

8月に沖縄の灼熱の太陽の下、韓国と日本全国から聖公会の青年たちが集まり、話を聴くこと、現実を見ること、現場に立つこと、感じ・考えること、意見を交換しあうことによって、戦争の悲惨さ、酷たらしさ、悲しさを、改めて心に刻みました。また、軍備というものの功罪、すなわち、軍需景気と呼ばれ日本の戦後復興にも大いなる貢献をし、現在も軍備に直接・間接に携わる、世界中の人々の生活の糧となっている一方で、抑止力という大義名分でごまかされながらも、確実に負の連鎖をもたらしていることについて、もどかしい気持ちでいっぱいになりながら、理想と現実の狭間で思い悩みました。

それから、かつて一般市民を巻き込んだ地上戦が繰り広げられ、そして現在も多くのアメリカ軍基地によって県土の多くを占められていながらも、継承され続けてきた沖縄のすばらしい文化と、豊かで美しい自然に触れたただ、理屈抜きでそれらを失いたくはない、せめて人間の手で破壊することだけは避けたいという切望を共有するに至りました。

師走も半ばを過ぎた今現在でも、参加者個々人の中に、8月に沖縄で抱いた様々な思いが今も存続しているに違いないとは思いますが、その思いの具現化は、果たしてどうなっているのでしょうか。

京都教区では、沖縄での青年大会を受けて「平和の礼拝—辺野古につながる」という催しを、青年有志が主催しているという動きがあるようですが、東北教区では青年大会参加者による報告会を行ったのみで、今回の青年大会の内容をふまえての具体的な教区単位での動きは、まだありません。予定も立っていない状況です。

広大な地理的条件や内向的な地域性もあってか、青年の姿が埋没してしまっているよ

うに感じずにはいられない東北教区ですが、毎年夏に行われているユースキャンプという青年活動があります。私の個人的な考えとしてあるのは、その、教区内の青年が集う貴重な機会に、直近の青年大会で取り組んだ主題にも触れる、ということです。取り入れ方は色々考えられますが、例えば、辺野古での反基地活動のDVDを皆で観る、辺野古を覚えて祈りを捧げる、もしくは、青森県にある三沢基地について学ぶこと、などが挙げられます。

京都教区のように具体的な行動を起こすことにこしたことはないのかもしれませんが、容易に実現できることから始めるしかありません。今回の沖縄での学びは、まずもって“知っている人を増やす”ことが重要であると私は考えます。そしてそれを、具体的な行動に結びつけていければよいのだと思います。幸い、青年大会は4年ごとですから、次回までの4年間を空白にするのではなく、直近の青年大会の内容を教区内に持ち帰り、共有するための時間とすればよいのだと考えます。

2. 青年大会というものを通じて感じたこと

今回初めての大会参加で、4年に一度、日本中から同じ信仰を持つ若者ばかりが集まり一堂に会するということが、ただそれだけで exciting なできごとなのだということを知りました。そしてなによりも、全国に散在している同世代、もっと言えば同じ年齢の兄弟姉妹達の多さに感激しました。

10代から30代、40代まで幅広い年齢層の兄弟姉妹達が集うことも青年大会の魅力であるのだとは思いますが、やはり、生まれ育った時代背景が一緒で、置かれている状況が似ていることも多いために、考えや思いを共有しやすい同世代との出会いは、特別な思いを抱かせてくれます。普段、老年・壮年世代ばかりの教会では感じることもない、漠然とではありますが、希望と期待に満ちたよう

な気持ちにさせてくれるのです。

その多くの同世代の兄弟姉妹達との出会いは、青年大会が、そこでの学び以外の事柄への、契機や動機付けの場でもあると教えてくれました。

大変嬉しいことに、私個人が常日頃感じていた、聖書の学び、祈りについて同世代だけで学びたい、という思いに共鳴してくれる兄弟姉妹達が大会参加者の中で見つかり、11月にその学びの時を持つことが現実となりました。現在も引き続き電子メールでのやりとりをしながら、次回の学びの時を計画中です。

もしかすると、既に他にも同じような繋がりができているかもしれませんが、青年大会は色々なことのきっかけになり得るという点からも、多面的な可能性を秘めているといえるでしょう。その可能性に参加者自身が気づき、生かして欲しいと思います。以上

東京教区（中村真希）

最終日のシェアリングでそれぞれの思いを分かち合いましたが、東京教区では一人一人がそれぞれの体験に応じて異なる思いを得ていることが印象的でした。それは今の自分にできることだったり、将来に向けてのビジョンだったり、それぞれの活動の場という文脈と合わせて言えることだったり、9者9様の思いがありました。というわけで、東京からの参加者として、という1つの枠組みで何かを発信してゆくことにはつながりませんでした。それぞれが沖縄に行って得てきた何かをそれぞれが自分の日常の中でつなげていくという強い思いを確認することができました。また、東京教区の皆さんにもそれぞれが沖縄で貴重な体験を得てきたことをアピールすると共に、送り出してくれてありがとうという思いを伝えるため、具体的には次の2つのことが挙がっています。1つには

9/23 に行われる東京教区の教区フェスティバルでアピールするという。展示スペースで全国の様子を伝えると共に、今年のフェスティバルの目玉イベントである「あなたに届けたい3分間音楽祭」での出演が決まっています。何でもさとうきび畑に扮した参加者の皆さんがあの名曲を歌うとか歌わないとか・・・いずれにしても必見です。それから9/28に行われる東京教区の下町合同研修会において、全国青年大会の報告をすることになりました。沖縄でどんな体験をしてきたのか、そしてそれぞれが何を感じてきたのかを多くの皆さんと分かち合うことができればと思います。9者9様の思いの中には、東京教区の中高生或いは小学生と一緒に沖縄へ行く機会を作りたい！もっと青年たちと一緒に教会という場所に私たちがいる意味を考えたい！等々次につながるようなモチベーションが確認されています。4年後の次の全国青年大会までに、これらがどう花開いていくのか、楽しみにしたいと思います。（そして私もまだまだ現役で楽しんでいきます！）

中部教区（まとめ）

全国青年大会4日目のセッションでの一人ひとりの言葉

- ・ 平和とは、学ぶべきものではなく、“感じ、伝えるべきもの”であることに気付きました。
- ・ 大切なものを見失わない 目をくもらせない
- ・ 自分1人では、できないと思ったことが、皆が集まるとできるような気がした。
- ・ この4年で、僕が動くと、ともに動いてくれる人がいることを知った。
- ・ 実際に触れて感じたこと、平和について自分なりに歌っていきたい。
- ・ 自分の目で、耳で、手で実際に感じることに！！

- ・ 「そこにとともにいる」ということを大切にしたい。
- ・ 無知であることに気づけ。無知では何も変わらない
- ・ 沖縄に行かれる人にもきちのこをしっかりと辺野古の海をたいせつにのこしたい。

これからの活動について

中部教区の青年は、広範な地域にひろがる教区のなかで、一つにまとまったの活動はこれといって行なわれていないのが現状です。しかし、伝道区ごと、あるいは近隣の教会の青年に呼びかけての集まりが持たれているところもあります。そのなかの一つに、名古屋市周辺の教会につながる青年で今春から始めた「聖研」があります。

わたしたちに今できることは、沖縄での全国青年大会に参加した青年を含むこの「聖研」のメンバーを核に、沖縄での経験を分かち合い、学びを続け、今後自分たちにできることは何かを話し合う集まりを持つことだと考えています。そして今回全国青年大会に参加出来なかった青年にも呼びかけ、思いを行動につなげられるよう、会を重ねていきたいと思います。

そして、全国に広がる他教区の仲間たちと協働し、わたしたちで平和を作り上げていくことを望んでいます。

京都教区（まとめ）

沖縄や韓国の悲しみを知ったことにより、自分の歴史だけでなく相手側から見た歴史も知り、伝えてくれる人の気持ちを受け止めることが大切だと感じた。流暢に話される言葉だけでなく、つたなく聞こえる言葉も大切に聞きたい。そこで初めて知ることがあることを知った。

自らすすんで行って隣人となり、隣人を愛する努力をしたい。輪が広がって世界中に隣人が増えていけば、一人では微力だけれど、

集まることによりできることがある。

小さくとも声をあげることで何かが変わるはず、できることが必ずあるはず。

私たちが青年大会で見たもの、聞いたもの、触れたもの・・・経験したものは、その人の雰囲気からにじみ出て、醸し出されるはず。言葉を発するとき、また何かを選択するときなどに経験が影響する。経験をより自分たちの中で確かなものにする、育てるためには学び続けること、忘れないでいることが大切。勉強すること、各々がひとりで考えることも大切。そして思いを持ち寄り、仲間同士で分かち合う。平和への一歩として機会を持ち続けなくてはならない。

私たちの場所でも「命の言」に出会い、自分の、そして出来ることから周りの人のコップを「命の言」でいっぱいにする時を持ち続ける努力をする。

京都教区では以前から青年の集まり「ぼこぼこ」を不定期ではあるけれども行っている。また小・中・高校生向けのキャンプが盛んで、青年はそのスタッフとして関わっている。これから新たな場を作ろうとするのではなく、今までに与えられている場を自分たちの手で活用・活発化し、自分たちが経験して感じたことを伝えそして分かち合うことができるように頑張る。

まずはその第一歩として、9月14・15日の「夏の報告会'08」に於いて、青年大会に行った自分たちの経験を、今回参加することのできなかつた身近な仲間伝える。

神戸教区（林和宏）

今回の沖縄における青年大会の期間中、2回ほど神戸教区の青年達を部屋に集めて分かち合いを行った。今回の沖縄での青年大会において多くの青年たちが、「沖縄」という言葉へのイメージを大きく変えられたと話していた。沖縄と言えば多くの人々がリゾート地として訪れる場所ということを通じて

連想する。しかし、実のところは多くの沖縄に住む人々が心に深い傷を持っている。過去の歴史の出来事への痛みのみならず、今も様々な側面において沖縄は傷を負っている。

本来ならば、沖縄に行く前に、沖縄の歴史や現状を学ぶ機会を持って、青年大会に参加する必要があったと思う。今回の参加者は教区内の様々な地域から参加しているのでなかなか集まる機会を持つのは困難であったにせよ、何か工夫して、事前に学びの会を行うことの必要性を感じた。

しかしながら、今回の青年大会での時間を通して、青年達は沖縄の歴史・現状を「見て」、「知る」ことが出来たと話していた。

神戸教区には広島という被爆地がある。来夏は、神戸教区中高生大会と同時に青年達を広島に集めて、8月6日の日を憶えて祈りつつ、平和について学ぶ時間を持つ。沖縄の人々の持つ痛みを知り、学びつつ、広島においても今なお、被爆の後遺症に悩む人々、被爆によって心に傷を負い、悩んでいる人々が多く存在する。広島だけでなく、長崎に、そして沖縄に、戦争によって心と体に深い傷を負っている人々が存在している。これからの未来を担う青年たちが、こうした過去の歴史、現状を「学び」、「見て」、「知る」ことを通して、どのように生きていくことが大切なのかを夏に向けて青年会として考えていきたい。今回の沖縄青年大会においての反省点も反映させて、広島のみならず、長崎、沖縄のことも含めて、祈りと共に学ぶ機会を作り、「平和」についての学びを青年会にて行っていきたい。同時に、聖書の分かち合いを通して、主イエスが伝えられた「平和」とは何であるか？を互いにシェアしていく機会を取りたい。一人一人、感じ方、とらえ方は違うかもしれないが、教会に集つめられた者として、聖書の声に耳を傾け、祈りと黙想を通して、少しこうした時間を学びの中に取り入れて平和について学んでいきたい。

九州教区（浜生牧恵）

セッション④で分かち合った内容は、

沖縄で起きたこと、起こっていることを知り、大きな衝撃を受けた。

沖縄戦、集団自決、「そこにいる自分」を考えてみたが、とても想像できなかった。それほどのが実際に起こった。「なぜ、なんのために、だれのために、起こった？」ということがよぎった4日間だった。

辺野古に立ち、基地建設阻止活動している人たちの、つよい思いに触れた。「非暴力」という強さ、おじいの涙。教育、報道とのギャップ。もう「知らない」とは言えない。

とにかく、沖縄に、辺野古に、平和のために、役に立ちたい。

できること

- 1、自分が知ったことを、自分のまわりにいる人に伝える。
 - ・ 報告会をする 9月7日、14日
- 2、もっと知る（もっと広く、もっと深く）。
 - ・ 定期的に勉強会をする（まず辺野古について、そして世界で起きている他のことも） 第1回 9月6日
 - ・ 「辺野古通信」を見る（今起こっていることに関心を持ち続ける）
- 3、まわりの人の思いを聴く
 - ・ 大会期間中の写真を見せて、平和について話をする機会をつくる
- 4、選挙に行く
 - ・ 国、政治を作っていくのは、「自分」という意識を持ち、責任を持つ
 - ・ 変えられるところから変える という信念
- 5、エコなことをする（地球を大切におもうこと、いのちを大切におもうこと）
 - ・ 地球規模で考えると、他の国を攻めるという考えは無くなるし協力したくなる
 - ・ 未来に残すことを考えると、地球を、

「あのきれいな辺野古の海」を大事にせんばと思える

小さいことでも、気付いたことをしていこう。そして、話し合おう。

沖縄教区（まとめ）

青年大会を通して感じたことは、自分たちが「慣れてしまっていた」ということ。生まれた時から基地があったから、違和感を覚えたことなんてなかった。悲惨な戦争がこの地で起こり、まだにそのつめ跡が残っているけど、すべてが日常の一つになっていて、深く知ろうとはしなかった。壕などの戦跡にも、いつでも行ける距離にあるのに行かなかった。学校の授業で習ったり、話を聞いたりしたことはあったけど、自分から知ろうとはしなかった。

けれども、青年大会で県外からたくさんの人たちが沖縄に来て、みんなと一緒にいろいろな所に行って話しを聞いて、自分たちの沖縄が見えてきた。

基地を見て、みんなが驚いていたことに驚いた。初めて壕の中まで入った。そして、初めて本当の真っ暗闇を体験した。戦跡や資料館に行き、いろいろな方から話しを聞いて、沖縄戦の悲惨さを改めて思い知った。初めて辺野古に行った。どんな人たちがどんな思いで

海を守ろうとしているのかを初めて知った。

沖縄を改めて知ることができた。では沖縄にいる私たちには何ができるか。

- ・ 自分が見たこと、聞いたこと、感じたことなどを沖縄の中で広める。
- ・ 現状に慣れて、それを受け入れてしまわないようにし、戦争があったことや、いろいろな人たちの思いを風化させない。
- ・ 他県に行ってみるなど、他の視点から改めて沖縄を見る。
- ・ テレビや新聞などで見るだけでなく、何事も実際に行って自分で実感する。
- ・ 1度きりで終わるのではなく、継続させるようにする。

以上のことを繰り返すことによって、自分たちが変わり、自分の周りの人たちを変えて、政治の流れを変えて、沖縄を変えていきたい。

⇒「Change」

沖縄教区の青年の活動は、現在ほとんど行われてない。だから、少しずつ始めていきたい。まずは、一人ひとりが今回の経験をしっかり自分のものにして持ち続ける。そして、各自の教会に帰ってそれを伝える。県外に出ている人、仕事が忙しい人などもいるので、声を掛け合って集まれる時に集まり、交流を深めながら、少しずつでも活動していきたい。



12. 閉会礼拝でのお話

実行委員長・松山健作

「そこにキリストは共にいる」というテーマで、私たちはこの沖縄に集まりました。140人の仲間が集まり、3泊4日を共に過ごしてきました。それはみなさんにとって、どのようなものになったのでしょうか。少し思い返してみてください。

私たち140名は、この沖縄に様々な思いを持って集まりました。「青年大会に参加したい」、「沖縄に行きたい」、「新しい仲間と出会いたい」など、そういった理由で集まってきたかもしれません。しかし、私たちの思い以前に、神様の御力が働いてこの沖縄に私たちは集められたのではなかったのでしょうか。本日の福音書でありましたように、主は72人の使徒を任命し派遣されました。任命の前に、使徒たちが72人も集められています。私たちがこの沖縄に集まったこととは、神様の御心に叶うものであり、神様が私たちをこの沖縄に集めて下さったという事ができるのではないのでしょうか。

そして、私たちはこの沖縄に集まることによって大きな「収穫」を得ました。私はこの沖縄で「命」を得ました。そして、みなさんから「命」を得ました。多くの「命」に触れることができました。私たち一人一人が、目で見て、耳で聞いて、手で触れたものは大切な経験となりました。また、多くの仲間と出会い、分かち合い、多くの交わりを得たこと。それは神様が私たちを集め、そのように働いてくださった。そのように思います。主はこのような言われます。「収穫は多いが、働き手は少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように」と。私たちは収穫(=命)のために送られた者たちなのです。

そして、主によって集められた私たちは今、最後のプログラムである閉会礼拝を迎えて

います。私たちは閉会礼拝を終えたのち帰路につきます。しかし、私は声を大にして言いたいことがあります。「青年大会はこれで終わるわけではありません。」(終わらせたくない)みなさんが帰路についた。その帰路についたところから始まるのです。私たちの主は「行きなさい、わたしはあなたがたを遣わす。」と言われます。私たちが「行って、遣わされること」、つまり帰路からが始まりであり、新しい出発であるのではないのでしょうか。新しい出発は、不安で心細く、勇気の必要なことかもしれません。しかし、主が私たちを遣わして下さり、生活に十分な恵みを与えて下さります。私たちに新たな「命」をお与えくださいます。常に主を信じて歩むことができるのです。どうぞ、みなさん！主が言われる通り、主が願われる通りに、新しい一歩を踏み出してみようではありませんか。

私たちはこれから閉会礼拝の聖餐式の中で、陪餐を受けます。どうぞ、多くの苦しみを背負って主が十字架の犠牲となったことを思い起こして下さい。そして、主の復活を思い起こして下さい。私たちは主イエス・キリストの「命」に養われるものなのです。主の体と血が私たちに与えられます。どうぞ、私たちが主と一致していることを深く感じてください。そしてまた、私たちがこうして集まれたことは一致のしるしであるということに心に留めてください。陪餐を受けられない人は、どうぞ主からの祝福をお受けください。

さて、みなさん！3日前のことを記憶しているでしょうか？私は挨拶において「心のトップ」というイメージトレーニングをみなさん行っていただきました。

みなさんは、この3泊4日の間に、「心のコップ」の中に多くの水を溜めて来られたと思います。みなさん、どうぞ帰路に着くまで、その水を飲まないでください。溢れそうになっているコップをそっと持ち帰ってください。そして、主がわたしたちに体を与え、血を与えてくださるように、みなさんも「心のコップ」の水を多くの方々に分け与えてください。今度は自らで飲み干すのではなく、より多くの方々と水を飲んでいただきたいのです。

最後になりますが、私はみなさんと出会えたことに感謝しています。みなさんと共に集まり「命」を共有できたことに感謝します。多くの仲間と出会うことができた。それはかけがえのない恵みです。また、これから様々な活動していく中での原動力、勇気、心の支え、命の源となるでしょう。仲間と出会い、共にこの沖縄で、目で見たいもの、耳で聞きたいもの、手で触れたものは、一つの思い出や出来事だけでは終わらせたくない。もっと大きな広がりあるものにしたいと思います。是非みなさんには今回得たものをより多くの仲

間に伝えてほしい。「心のコップ」の水を多くの人々と共有してほしいと願います。青年大会に参加したくても出来なかった仲間、また私たちを支えてくださる各教会、教区みなさんに、どうぞ分け合ってください。

「そこにキリストは共にいる」いて下さるということに感謝します。

お祈りいたします。

全能の父なる神よ、私たちは3泊4日のプログラムをあなたの導きによって過ごすことができました。私たちは、この沖縄で多くの仲間と出会い、あなたからの豊かな恵みを、またあなたからの「命」の収穫を受けることができました。感謝いたします。私たちは閉会礼拝を終え、これから家路へとつきますが、その最後までを導いてください。

そして、私たちが家路に着いた後も、あなたがこの沖縄で私たちに与えてくださった、御恵みが働きますように。私たちがあなたから喜ばれる者として希望を受けて下さい。遣わして下さい。命を与え続けて下さい。この小さき祈りを、私たちの主イエス・キリストを通してお祈りいたします。アーメン



13. 各教区参加者の感想

東北教区 関澤 美育

8月20～23日に沖縄で行われた全国青年大会に参加しました。私にとっては今回が初の沖縄で、行くまでは白い砂浜・青い海…といったリゾート地のイメージが大きかったです。しかし実際に行ってみて、沖縄は日本で唯一戦場となり今もなお多くの米軍基地が置かれ戦争の影響が感じられる場所であり、平和について深く考えさせられる場所でもあるのだということを感じました。

4日間のプログラムの中で、沖縄戦が行われた当時約1000人が暮らしていた「糸数壕」などの戦跡や、戦争の様子を描いた壁一面ほどの大きさの「沖縄戦の図」が展示してある「佐喜眞美術館」、「韓国人慰霊の塔」と全戦没者の名前を記すために今でも毎年新しい名前が刻まれている「平和の礎」に併設されている「沖縄平和祈念資料館」を見学したり、沖縄を通して平和のメッセージを伝える会沢芽美さんのお芝居を観たり、米軍基地の建設が予定されている辺野古の海で座り込みをして反対活動をしている方々の話を聞くなど様々な体験をさせていただきました。青年大会を通じて私が強く感じたことのひとつは、よく言われることですがやはり「百聞は一見に如かず」ということです。沖縄が戦場になったことは学校で勉強して知っていたのですが、戦争が終わっても基地が置かれているという事実を知っているだけで、そのことについて深く考えたことはありませんでした。実際に街の中に存在している米軍基地を目にして、そして反対運動をしている方々の話を聞いて、戦争の犠牲となり、また逆に戦地に出向いて兵士として戦った過去を持つ沖縄の人々の苦しみや平和を願う気持ち、頭ではなく心に直接刺さってくるような感覚で伝わってきました。戦争はどんな理由があってもいけないこと、平和を守るこ

との大切さを、過去に大きな戦争をした日本人であるからこそ信念を持って伝えていけるのだと思いました。もうひとつは、正しいことは一つではない、ということです。今回の青年大会には韓国からも約20人の参加者がいて、一緒に話し合うことができる機会が何度かありました。その中で、何があっても戦争はいけないという意見に対して「戦争よりも、自分の文化や大切なものを守るの方が大切だ」と話した韓国の方がいて、過去に日本が彼らの文化を奪った歴史の重みを改めて考えることになりました。その人それぞれが見てきたもの、育ってきた文化によって価値観が異なり、そのどれか一つが正しいのではないので、お互いに分かり合えるのは難しいと感じました。平和とは何か、どうすれば世界が平和になるのか解決策を見出すことは難しいですが、今回沖縄という場所で平和について考える充実した機会を与我いただき、本当にありがとうございました。

東京教区 中村 真希

4年に1度の全国青年大会が沖縄で開催される！ということで、東京教区でもこの夏に向けて、色々な取り組みをしてきました。当初の野望よりも大分少ない人数ではありましたが、常連さんではなく、初参加の人・20代前半の若者たちが中心のメンバーと一緒にいくことができたのは大きかったかなと思います。今回、韓国の青年たちも一緒だということで、どんな大会になるのか想像が付きませんでした。最初は文脈の違いをシェアできないまま話し合いなど色々進んでいくことに不安を覚えたりもしましたが、最終的にはうまく交じっていったのが印象的でした。それはまずは「沖縄」という場所の持つ力が圧倒的に大きかったのではないかと思います。この沖縄の地で、理屈やそれぞれの

思いを超えた何かをまず見て、感じたものが、この全国青年大会に参加した参加者に共通の衝撃となって関係性に結びついていったのではないかと思います。また、辺野古で共に祈る体験や、これまで見て聞いてきたことを「命の言」としてどう受け止めるか、という最終日でのシェアリングなどで、ここに集まった私たちは聖公会という教会に結ばれているんだという、その土台についても確認することができたと思います。これによって大事な根幹の部分シェアできたことは、まさに教区を超えて青年たちが集う全国青年大会の持つ大きな意味だったと思います。多少スケジュールがハードかなあと思った部分もありましたが、様々な体験を通して自らが深められるだけでなく、その場を共有することで参加者それぞれの間に対話が生まれ、その関係性から次に発展してゆくことができるような、そんな時間が持てたのではないかと思います。少なくとも皆さんとっても楽しそうでした。なんて大人ぶったけど私もとっても楽しかったです。結果的には参加してよかった・東京からも参加者を動員できてよかったと思える大会でした。実行委員の皆さん、おつかれさま&ありがとうございました！

中部教区 伊藤 友里

「知らないでは済まされない。」

四年に一度行われる日本全国青年大会は、日韓合同のお祈りと伴に始まりました。今回の大会は韓国の方々も含め、約140人の参加者が集まりました。

沖縄戦の悲惨さをさまざまな角度からとらえる南部戦跡コースと、今も尚考えなければならない集団自決問題について、現地の人々の証言とともに見つめなおす渡嘉敷島コースの二つに分かれてのフィールドワークで、私は南部戦跡コースに参加しました。佐喜真美術館で見た『沖縄の図』、暗く足場

の悪い糸数塚、日本も加害者側であることを訴える韓国の塔、そして平和の礎と、私にとってはどれも単なる過去からの遺産物ではありませんでした。沖縄戦は過去の過ちではありません。過去を通しての今を生きる私たちの過ちでもあるのです。そんな思いとともに、三日目の辺野古での活動を迎えました。

じゅごんが見える丘からは辺野古の美しい海が見渡されました。そこでの現地の人の「この美しい海を満喫したからには、あなたがたはもう辺野古の米軍基地移転建設問題は他人事ではありません。」という言葉は深く心に残りました。私自身、頭から他人事と思っているわけではなく、ただ詳しく知らないといったところでしょうか。しかし、文頭に言った様に「知らないでは済まされない」のです。未来を担う私たちの務めは二度と戦争をしてはいけないこと。過去の過ちを繰り返してはいけないこと。そのためにも過去も今も沖縄で起きていた・起きていることは決して他人事ではなく、知らなくてはいけない事実だと思います。そのようなことに気付くことができた大会でありました。

そして、今回この大会に参加するにおいて、教会の多くの方々からの補助を受けたことを感謝せずにはいられません。

京都教区 北野 恵

今回私は、全国青年大会に初めて参加しました。参加しようと思った理由の一つには、沖縄で起こった戦争について、直接聞きたいと思ったことがありました。そして、あの基地予定地の辺野古で座り込みをするらしい、ということについても興味を持ちました。

二日目には、渡嘉敷島で起こった集団自決について貴重なお話を聞くことができました。渡嘉敷島は砂浜が白く、海も青い、とてもきれいな場所です。しかし、実際に集団自決の現場に行き、日本軍のために300人以上の島民が死ななければならなかったという

事実を知ると、なにかやるせない気持ちがこみ上げてきました。そして、お話の中の二つの言葉がとても印象深く私に残りました。

集団自決が行われた当時、家族単位で車座になり、軍から渡されていた手榴弾で次々と人が死んでいく中、体験者のお母様が、「そんな手りゅう弾、捨ててしまいなさい！」と言ったそうです。そして、「生きられるだけ生きよう。」そう思った、と語っていただきました。その場では、死ぬことが常識となっていたにもかかわらず、“生きる選択”をしたこの言葉に、重みを感じました。そして、大会中も今も、その言葉は印象深く残りました。

三日目には、基地予定地にされている辺野古を訪れました。辺野古と米軍基地が見渡せるジュゴンの見える丘に行ったとき、こんなにも美しい場所になぜ基地をつくらうとするのかと、人間の考えの愚かさにあきれてしまいました。そして、沖縄は今もなお、戦争で苦しまなければならぬのかと、再度、やるせない気持ちがこみ上げてきました。

私は、たった四日間を過ごただけでも、沖縄が抱える問題が数多く見えてきて、今現在でもうまく消化し切れていません。しかし、そんな私でも一つ整理できた思いがあります。それは、渡嘉敷島での「そんな手りゅう弾、捨ててしまいなさい！」という一言がきっかけです。この一言が、「そんな基地、捨ててしまいなさい！」「そんな人を殺さなければいけないような武器や基地は持たなくていい。捨ててしまいなさい。」と、基地建設賛成派の人たちに語りかけているように思えたのです。

一日目に、武装がいいのか、非武装がいいのか、と平和の中に暮している私たちが議論するとなかなか答えは見えてきませんでした。しかし戦争中に、死ぬことが当たり前になってしまった中で発せられた、「捨ててしまいなさい。」という言葉が正解なのではないかと思いました。

今は、沖縄の戦争が一日でも早く終わることを心から祈ります。そして、この大会で得たことを、少しでも多くの人に伝えていきたいと思っています。

大阪教区 高木 謙一郎

僕がこの沖縄で行われた青年大会に参加しようと思ったのは、ひとつには沖縄のことを知りたいという思いからでした。というのも、僕の通っていた学校の歴史の授業といえ、旧石器時代、縄文時代から始まり、明治維新あたりまでをしっかりとやって、明治以降、特に昭和のあたりまでくると3学期の終盤で時間がないということで残りを簡単にすませしてしまう、もしくは最悪の場合カットされるというありさまでした。僕の場合、現代の日本人が学ぶべき最も大切な部分(戦争の歴史など、現在にも関わっている事柄)は学校では教えてもらえませんでした。このようなことを学ぼうと思えば、自分から積極的に動かなければいけないと感じていました。

そういうわけで、青年大会に応募したわけですが、先にも書いたとおり学校では昭和の時代のことはほとんど学んでいませんでした。まして、兵庫に住んでいる僕が今まで沖縄の歴史を学ぶ機会などあるはずもなく、青年大会に行く前は沖縄のことはほとんど何も知らないといってもいいほどでした。このまま行くのはまずいと思い、図書館で本を何冊か借りて、本当に簡単にですが少しばかり準備をしました。

そんなこんなで青年大会本番を迎えたわけですが、現地ですさまざまなプログラムを通して感じたことが2つあります。

まず、実際に現場に行くことの大切さを感じました。例えば、単に本で『沖縄戦時、糸数壕(洞穴)に地元住民や傷病兵が避難して生活していた』と読むよりも、実際にそこに自分の身を置いて井戸などの生活の跡を見たり、ライトがないと歩くことさえ難しいほど

の真っ暗闇を体験したりすることで、当時そこで生活していた人はどれほど恐ろしく大変な思いをしたのだらうと想像するほうがより身近な問題として捉えることができるし、また単に『沖縄戦の犠牲者は24万人』と読むよりも、犠牲者の名前が刻まれた、気が遠くなるほどの莫大な数の石碑を目の当たりにし、刻まれた名前のひとつひとつに目を向けて、この人にも人生があつていろいろなことを経験してきたんだらうなあと思いを馳せるほうが、よりそのことの重大さを実感することができると思います。

たいていの人は戦争はだめだと考えているでしょうが、そう考えるのは戦争が起これたらどうなるかを、ある程度想像できるからでしょう。でも、その人間の想像力というのはそんなに強いものではないと思います。実際、現在でも世界各地で戦争、テロが絶えません。戦争というのは国の長などの権力をもった人が引き起こすことが多いですが、そういう人ももともとは戦争に賛成だったわけではないはず。地位が高くなり、たくさんの人を動かしたりいろんなことができる状況になってしまうと、目先の利益に目がくらんだり、曲がった思想をもつてしまったりして、その結果戦争をしようとしてしまうのだと思います。そのようなことを考えると、もちろん本などで得る情報も大切ですが、現場に行って戦争の悲惨さを肌で感じ、他人事ではなく自分の問題でもあるんだと実感することは本当に大切なことだと思います。

もうひとつは、客観的な視点をもつことが大切だということです。先にも書きましたが、僕が青年大会に参加させてもらったのは単に沖縄のことを知りたいと思ったからで、もちろんのことですが決して何か思いがあつて活動をしに行ったわけではありませんでした。だから、僕がこんなことを書くのはおこがましいことかもしれませんが、案内に辺野古で基地建設反対のために座り込みをす

ると書いてあるのを見て抵抗を感じましたし(実際は座り込みをするという感じではありませんでした)、辺野古の米軍基地の境界線上の有刺鉄線に、いろんな人の思いがかかれたリボンが巻きつけられているのですが、そこであらかじめ「NO BASE(基地反対)」と書かれたリボンを束で渡されて巻いてくるように言われたときは、何でこんなことをしないといけないのだらうと不思議に思いました。そんなことは人から強制されるものではなく、自分でしっかり学んでからその後でどうするか決めるべきだと思うし、自分が書いたものならまだしも他人の書いたものをそのように巻くことは、辺野古で必死に座り込みをしている人に対しても、基地で働いている人たちに対しても失礼なことになるのではないかと、という思いもありました。

思いが強くなると、どうしても一方的な見方しかできなくなることも多いのではないかと思います(僕自身もそのような経験がよくあります)。例えば基地の問題にしても、基地建設のデメリットばかりが強調されていますが、メリットもあります(大きい、小さいは別にして)。確かに「基地反対!」という意見を聞くと、それがもっともらしく聞こえて本当にそのとおりだと思いがちです。しかし、単純にその人の意見に流されてそのように思うのではなく、メリットの部分にも目を向けた上で考えなければいけないと思うのです。

青年大会が終わって、今は沖縄のことに興味をもち、もっと知りたいと思うようになりました。まだまだ知らないこともたくさんありますし、沖縄のことを学ぶ良いきっかけになったのではないかと思います。そういう意味でも本当に参加してよかったと思っています。将来自分に何かできることがあるのかどうかはわかりません。でも、もし何もできないのだとしても、関心を持って学ぶことは決して意味のないことではないと思います

し、そう信じて、今回感じたことも忘れずにやっていきたいと思っています。

大阪教区 荻野 直人

はじめに

2008年8月20日から23日に開催された「日本聖公会 全国青年大会 in 沖縄-そこにキリストは共にいる-」に、私が所属する大阪教区から12名の青年が参加した。この大会は、日本聖公会の全国の青年が四年に一度ひとつの場所に集うという以上に、その大会が沖縄という地で開催されたことに大きな意味があった。今でも沖縄には戦争の傷跡があり、全国の70パーセントにも達する米軍基地問題や集団自決に関する教科書検定問題などの諸問題が山積している。このような地で、聖公会とかかわりのある人たちが一同に集い、キリスト教的な発想を土台にして沖縄問題を考えるということは私にとってとても貴重な体験であった。以下では、青年大会を「私たちの社会が抱える問題を理解するためには何が必要か」「私ができる今後の取り組み」「大会中に一番印象に残ったこと」という視点から振り返りたいと思う。

1. 歴史的な存在としての私たち

大会3日目の夜に、他教区の参加者たち三人と沖縄の問題について議論する機会があった。その日の昼間、私たちは普天間基地の移転先となっている辺野古という場所に来て、議論のテーマも基地問題であった。今までは自分たちからは離れたところにあった問題にいざ直面すると、大きな無力感を感じる。ある参加者が「沖縄から離れたところに住んでいる私たちにできることはなんだろうか」と発言し、周りの人たちも頷いていた。おそらく、参加した人たちの多くがそのような気持ちを抱いたのではないだろうか。私もそのうちの一人であった。なぜ、そのような無力感に陥ってしまうのだろうか。その疑問について、私はこう考える。「沖縄の

基地問題をきちんと理解できていないからだ」と。

では、沖縄の問題を理解する、とはどういうことだろうか。私たちは、辺野古で基地建設反対運動を実際におこなっている方々の話を聞き、米軍基地の敷地のすぐ近くまで行って来た。現地のおじい、おばあの生の声を聞き、多くの参加者が感動し、米軍基地の建設問題が抱える根の深さを実感したと思う。しかし、だからといって解決方法が見当たるところではないということが、この無力感の正体だろう。つまり、現場である辺野古の地に立ったからといって、米軍の基地問題を理解できるわけではないということが重要である。私たちが社会問題に立ち向かうときに注意しなければならない点は、現在、浮き彫りになっている問題というのは、今までの歴史の中で存在しているということではないだろうか。日本の沖縄問題を考える上では歴史上の出発点は、琉球処分からである。それ以降の日本と沖縄の関係が太平洋戦争での沖縄戦という結果になり、戦後の日米関係に沖縄は振り回されているのである。その歴史の流れの中で、今日の基地問題が存在しているのだということを私たちは認識しなければならないのだ。もし、その歴史的脈絡を無視して社会的諸問題に取り組もうとするならば、私たちは途方に暮れてしまうだろう。

沖縄問題を現場の視点と歴史的な視点で捉えた上で、沖縄問題が存在する原因となっている社会の構造を理解しなければならない。沖縄問題がいつまでたっても自分の問題として考えることができない理由は、現場の人たちの姿を把握するために想像力の欠如と、社会構造に対する無理解ではないだろうか。沖縄と日本本土の関係、日米関係、国家と地方の関係など(もちろん、この他にも数え切れない要因があるだろう)把握することによって、社会の構造が見えてくる。構造が見えてくると、私たちの身の回りの諸問題もその

構造に関して存在しているということが想像できるようになる。このように把握することによって初めて、沖縄問題と自分がつながるのではないか。

2. 今後の取り組み

社会問題に立ち向かう上で、私たちが土台にするべき発想は、キリスト教的な考え方だろう。キリスト教的な考え方を生かすためには、キリスト教とはなにか、ということ問い続けていかなければならない。また、信徒である私たちには宣教の義務があるということ自覚しなければならぬ。大阪教区の青年部がおこなっている小・中学生のキャンプと高校生キャンプは、子どもたちや青年たちへの宣教の一環である。私が、教区キャンプに取り組む理由の一つは、自分たちの持っている考えや信仰、抱えている問題を次の世代である子どもたちに伝えていく使命があるからだ。そのためには、大阪教区の青年の組織力を強めていかなければならない。教区キャンプの企画にしても、青年スタッフの中で明確な目的を共有することが大切である。

このような、教区の中での取り組みはこの青年大会にテーマでもあった沖縄問題とは無関係だと思われがちだが、決してそうではないと私は思う。もちろん、沖縄問題に対する直接的なアプローチも必要だろう。しかし、沖縄問題を私たちが解決することは難しい。あくまでも、沖縄県住民の方々への応援・協力しかできないのだ。ただし、その応援をするかしないかで大きな違いを生む。地道な取り組みこそが問題解決の糸口だと思う。大阪教区にとっての地道な取り組みのひとつが、教区キャンプではないだろうか。まとめると、私の教区に対する今後の取り組みは、大阪教区の青年部の活動を活性化させるということである。個人的な取り組みとしては、社会構造を見抜くための教養を身につけることである。

3. 印象に残ったプログラム

最後に、青年大会中に最も印象に残った場面について述べたい。それは、辺野古の浜で参加者全員で捧げた礼拝である。司式をおこなった九州教区の柴本司祭は、辺野古で礼拝をすることが10年来の夢だったという。100人以上の人たちの平和に対する思いが一つになって捧げた礼拝はすばらしかった。そこで、わたしは、祈るということとはどういうことだろう、と考えた。「祈り」の持つ意味とは何だろうか。そういう視点で「祈り」を捉えようとするのは間違っているという気もする。祈るということは、何かに取り組むときの出発点ともなるのではないかと感じた。

さいごに

今回の日本聖公会全国青年大会は、社会問題とクリスチャンである私との関係について深く考えるきっかけとなった。企画・運営してくださったスタッフの方々には深くお礼申し上げたい。この経験を生かして、今後も教会活動に取り組んでいきたい。

神戸教区 執事 林 和広

1 意図

「そこにキリストは共にいる」というテーマのもと、約140名の参加者が沖縄に集った。そして、そこで苦しみの歴史を負う人々の痛みを知る、またその人々のど真ん中におられるキリストの臨在を感じるべく、分かち合いを通し、祈りを通して互いにシェアするという深い気持ちが伝わりました。特に様々な歴史的な場所において、ひとつになり祈りを捧げる時を持ったことは非常に素晴らしい時間でありました。

2 スケジュール

周到な準備とタイムスケジュールを組んでおりまして、その準備の裏側にある多くの人々の開催までの意気込みを感じた次第です。短い期間の中で、より多くの歴史的な場所に触れ、肌で感じて欲しいとの思いを感じ

ました。

3 内容

行き帰りのバスの中においてもそれぞれの担当者から沖縄の歴史的背景及び、現状等を詳しく話されておられたのは非常にその人人の強い思いが伝わった次第であります。また、現場においてもその場所その場所での説明があり、その場所で起こった歴史的背景を知ることができました。

4 私見

意図、スケジュール、内容は繰り返しになりますが、非常に周到に準備されていたように感じます。しかし、一方でタイトなスケジュールが故に全ての予定地を訪問する事が出来ず、説明も最後まで出来ずに終わった場所もありました。少し残念に思います。また、特に分かち合いの中で他の青年から聞きましたことは、もう少し、自分で自由に歩き、また見ながら、いろいろな物を肌で感じたかったとの声がありました。特に平和祈念資料館での時間があまりなく、資料館の全て見ることが出来ず、残念であったとの声が多かったと思います。また、韓国の司祭の方々からはもう少し韓国との青年との交わりの時が欲しかったとの声もありました。

しかし、様々な面で本当にこの青年大会に関わってこられた方々の深い、また熱い思いが伝わりました。青年の働きが今後の聖公会において不可欠であると言うまでもなく、多くの青年が教会に集い、神様の器として参与してくれることを願ってやみません。お疲れ様でした。

九州教区 小川 麻衣

私が青年大会に参加したのは、戦争と平和に対する関心が高まっていたからです。特に沖縄への思いは強かったので、青年大会の具体的なことは全く知らず、より多くのものを学べる気がして参加をしました。

四日間の大会を通して、強く思ったのは

「平和という生き方」です。

渡嘉敷島の集団自決の場で、実際にその場にいた吉川さんの語る内容の凄まじさ。たった63年前の出来事なのに、私は何も知らないのと同じようなものでした。学生の頃教科書で学んだ歴史は、まるで遠い昔のここのようだし、自分とのつながりを見つけ出すまでには至らなかった事を思いました。今、吉川さんが生きて私たちに語ってくれている奇跡を、私たちは繋げていかなければならないという思いを強く感じました。

翌日辺野古での、金井先生のお話で「沖縄に基地を許すと言うことは、私たちは加害者であるということです」という言葉を聞いたときに、エゴではない本当の平和のビジョンが見えた！と思いました。自分たちが虐げられているときに、加害者である側面までもはつきりと捉えて、行動を起こしている人たちがいる。辺野古にいつも一緒に座り込むことはできないけれど、自分のフィールドで同じように座り込むことはできるという自信が湧きました。

浜での礼拝後、嘉陽おじいの泣きながらの「ありがとう！私の生き方は間違っていなかった！」という叫び。私たち一人ひとりのことを御使いだと言ってくれたけれど、私にとっては嘉陽おじいこそが御使いです。私も嘉陽おじいの様に生きていきたい。今の社会でまかり通っているエゴや無関心とは離れて、日々の生活や考え方から変えていくことの大切さを学べた貴重な時間でした。

また、全国にいる仲間たちと出会えることができ本当によかったです。思いや学びを分かち合っていける人たちとの大切な出会いがたくさんありました。

青年大会が終わって、今までの日常と同じではないことを感じます。平和に対する熱い思いを、自分にできることの全てを忘れないで過ごしていくためにも、私には学びあえる仲間が必要でした。

新しい一歩を踏み出すための、大切な機会を頂いたことに感謝しています。ありがとうございました。

沖縄教区 岩佐 直人

「出会い」の中で

全国青年大会に参加して、いろいろと考えさせられることがありました。「沖縄」にしながら「沖縄」の平和問題に関心の薄い自分…。何ら行動に移せていない自分…。

今回、沖縄の若者たちと話し合った「もう一度違う視点で見る」「実際現場に行って自分の肌で感じる」は、私にとって新たな課題となりました。今、自分の中で定期的に辺野古に行ってみようかと思っています。

大会中、聖公会の若者たちが活気に満ちていて、私自身大きな刺激となりました。神さまに支えてもらっているの、私自身も神さまのために何かをしなければならぬな〜と感じた大会でした。

大韓聖公会 ソン・ホソン

日本の青年たちに聞いてもらいたい童話

沖縄に来てもう一週間です。空港に降りて鏡にうつった私の姿を見ながら、わたしはなぜここまで来ているのだろうかと思いました。久しぶりに皆とともに笑っている自分の姿が見たくて来たんでしょうか。

一日一日、プログラムに参加しながら神様が私を沖縄の痛みとこの地の平和な未来のために祈らせている理由を気づかせていただきました。

これから皆さんに童話を一つ聞いてもらいたいです。この話は3年前、今は日本で活動している 李浩平（イホピョン）司祭から聞いた素材をもとで作った話です。

昔、森の中の洞窟にはせむしの少年ジンボが住んでいました。長い洞窟生活で痛んだ体と栄養不足で皮膚は青く腫れていました。山菜をとり森に入った婦人達と狩に出た村

の男達はジンボが大嫌いでした。なぜなら、自分達と変わった外見、そして子ども達に見られたら皆驚いて泣きそうだからでした。それで村の魔女は悪智恵を出してその問題を解決しようと思いました。魔女はジンボにこう言いました。

「オーイ、せむしは太陽を100回見ると、その日、命を落としてしまうんだよ」

少年ジンボは恐れて洞窟の奥、深いところまで入ってそれ以外に出ようとしませんでした。彼は真っ暗な洞窟の中で世の中というのはどんなところなんだろうと夢を見ました。そしてこう思いました。

「王様なら太陽を落として下さることができるかもしれない。いつかお願いに参るのだ。」

実はジンボが生きている国の王様は悩みが続いて起こっていました。独りの娘、姫は父が心配で王の悩みを減らしてくれる人には大きな賞を与えようと皆に言いました。

多くの勇ましい若者達は王様の悩みを差し引くために戦争に参加し始めました。隣国を侵略し人を殺しました。將軍達は領土の広げに血眼になりました。戦績を収めて王様に敵の首を持って行きましたが王様は終わらない戦争にしわが増えるばかりでした。

ときが来たと判断したせむしのジンボは王様にお願いするために心を決めて外に出ました。村の人たちはジンボをからかって石を投げました。ジンボは血だらけで腫れた目は開けることもなかなか難しかったけれどもジンボは王様がいる宮殿に向かいました。

宮殿に入ったジンボは、王様に会いに来た人々を迎えにきた姫様に遭遇しました。ジンボは、父のことを本当に心配し愛する初めて会った姫の美しい心と眼差しで恋におちてしまいました。ジンボは王様にお願いすることもできず宮殿から追い出されてしまいましたが一目ぼれした姫を生きる理由としました。

「太陽を見て死んでしまうことがあっても姫を心に覚えたい。そうだ。絵をかこう。絵で永遠に心に留めるのだ。」

ジンボは画室に行って絵を教えてくださいようをお願いしました。

「出て行け。おまえのようなやつに絵は相応しくない」

画家はきっぱりと断りました。

ジンボは画室の掃除から画家の気にいるようにお手伝いをしました。画家は彼をこき使うのに慣れてやっと彼に絵を教え始めました。ジンボは毎日上り降りを繰り返している太陽を見ながら自分に残された時間がそんなに長くないということに心悶えていました。

ジンボの腕はかなり上がって画室の隅には姫様の絵が積まれていきました。村の魔女はこそこそ話し合っていた村の人々に言いました。

「誰か画質から姫の絵をこっそり盗み出してきなさい。せむしをこのままほっておいてはならない」

魔女は盗んだ絵を宮殿に持って行って、せむしがお姫様の絵を売っているとうわさを広めました。腹立った王様はすぐにジンボを捕らえられ王様と姫様の前に引かれました。

王様は絵を返して罪を認めるんなら命だけは生かしてあげると言いましたがジンボは姫にこう告白しました。

「姫様、わたしはここで死んでも構いません。目がなくても姫を描けるからです。既にあなたを私の心に描いておいたからです。わたしに生きる理由を与えてくださったことありがとうございました。」

王様の命令を待っていた將軍達はジンボの首を刎ねるために刀を取り出しました。そのとき姫は王様にこう言いました。

「父上。あのせむしは見なくても絵が描けるんだと言っています。真かどうか確認して処刑しても遅くないでしょう。」

大韓聖公会 イ・サラ

平和の働き人になりたい。

毎年、夏になると日韓聖公会の主催で日韓青年キャンプが行われる。平和のために働く青年たちを養成し、日韓青年たちの交流を目的としている。私は3年間このキャンプに参加している。私はすでに3年間この夏キャンプに参加している。年毎に開催地を韓国と日本を変えながら行われている。今年日本最南端「沖縄」で開催された。このキャンプのお知らせを読みながら、今年は今までのキャンプとは異なって観光中心で行われると思っていた。本当に軽い気持ちで沖縄に行った。はじめの日は日韓青年キャンプの目標より太平洋の透き通って美しい海とその海に似ている空を楽しんだ。

翌日から、沖縄の歴史を学びながら、すぐ沖縄がただ美しい島ではないと知らされた。沖縄が日本の領土ではなかったこと、強制に日本に服属されたこと、米国と日本の戦争において日本本土を守るため犠牲されたことなど数え切れないほどの痛い歴史を抱えている島であった。

私たちはその歴史の現場を直接訪ねた。最初に沖縄での戦闘が始まった海岸が見えるグスクに行った。青い海と白い珊瑚が広がってあって、まるで一枚の絵のようだった。しかし、戦闘当時の海は血で赤く染められ、米軍の爆撃によって島全体が珊瑚白い粉で白く覆われたそうだ。

その次に訪問したのはガマであった。真っ暗な洞窟で住民たちの「集団自決」があったそうだ。しかし、厳密に言えば自決ではない。人々は米軍に対する徹底的な洗脳教育によって米軍に対する誤解と恐れのため降伏も出来ないまま親が子どもを、子どもが親を友が友を、また自らを殺す惨たらしいことが行われたそうだ。ここで、私たちは心から二度とこのような残酷な歴史が繰り返されないように祈った。

しかし、沖縄は未だに苦痛が絶えない。沖縄という島に米軍専用基地の78%（面積比）が集中（共有の東富士演習場等は含まず、含めた場合は24%）しており、沖縄本土面積の20%に至る。軍事練習のみならず、一日にも滑走路を数回離着陸する飛行機の騒音による被害は危険と伴い深刻である。普天間飛行場の移設予定地であった辺野古にも訪問した。美しい海を埋め立てて飛行場を作ろうとする計画に反対して座り込みをし続けた人々に会う事が出来た。最近、ジュゴンの生息地でもあることが知られ、埋立地が出来る場合、生息は困難であるそうだ。私たちはこの辺野古で、命のためお互いに手に手をつなぎ、礼拝をささげた。

私はこのキャンプに参加し、以前よりも印象に残る経験をすることが出来た。美しい風景の中に存在する痛みの戦争の歴史に触れ、またその恐怖も感じた。戦争という出来事がどんなに大きな苦痛を残すのか、またその戦争の空しさも確実に知ることが出来た。再びこのような歴史が繰り返さないことを願っ

ている。そのためには私たちがもっと現実に関心を持つべきであると思う。今も戦争は絶えない。大切な命が戦闘によって、爆撃によって失われている。私たちはその現実から目をそらしたり、無視したりしてはいけない。今すぐは戦争に遭わないだろうけど、いつその苦痛が私たちに迫ってくるか分からない。だから私たちはいつも平和に向かって働かなければならない。戦争が悪いこと、この世から無くならなければならないことを知らない人はいない。しかし、戦争が仕方なく起こっていると思う人々が多い。資本のため、戦争は必要悪であると思う人も多数である。その事実を知らせ、私たちが戦争を支持しない時、戦争はいつかこの世に存在しなくなるであろう。

一人の力は小さいが、一人一人が集まって世になる。私はクリスチャンから平和の世の働き人になってほしい。

（※これは、名古屋学生青年センター機関紙「声」に掲載されたものです。）

14. 参加者名簿

主教 谷昌二(沖縄教区主教)

[北海道教区]

伊藤詩帆 伊藤涼 上田ちほ 大町出
司祭 下澤昌 出町勇人 成田敬憲 福富果乃子
藤井三四郎 松崎幸信

[東北教区]

影山愛 司祭 越山哲也 太田裕吾 関澤美育

[北関東教区]

平岡康弘 斎藤徹

[東京教区]

熱海理絵 中村あかり 中村真希 中村真理
坂根久仁子 佐藤真理 玉野将和 和田岳
吉田尚史

[横浜教区]

平井拓 倉田美雪 司祭 武藤謙一 八城紀美香
吉川智之 司祭 相沢牧人

[中部教区]

相原太郎 池住圭 石田雅嗣 伊藤友里 岩田信矢
加藤えみな 松倉圭佑 司祭 野村潔 大木純朴

大西忠信 榊原光一 司祭 下原太介 服部樹美
Claire Louise Gelder

[京都教区]

韓イエスル 伊藤真紀 北野恵 松山律子
村上政広 西田貴之 下条言行 下条美香
高田菜穂子 柳原健之 Noreen Khin Lay Nyunt

[大阪教区]

浅海由里恵 原楨希世子 司祭 任大彬 金山由衣
金姫貞 眞子義人 村上恵依子 盧承勲 荻野直人
岡増希美 高木謙一郎 上田結子 保倉拓人

[神戸教区]

司祭 藤井尚人 広瀬愛理 執事 林和宏 野間美怜
杉野達也 脇坂亜紀 輿賀田光嗣
Tolhurst Paul Michael

[九州教区]

浜生牧恵 早川七奈子 久保和雄 小川麻衣
岡田直樹 佐々木崇 柴田敬介 柴本さゆり
武田宗久 山本尚生 山崎洋

[沖縄教区]

神崎直子 並里翔 西平妙子 下地美津枝
高良怜子 上原成和 大井和明 司祭 姜勇求

【大韓聖公会】

主教 金根祥 司祭 李京浩 司祭 金光俊
司祭 金大原 趙敏暎 洪誠浩 許昇 黄夏鎔
金藝瑟 李恩知 李주영 李光調 李사라
文智園 徐小禧 蘇美林 尹相敦 柳炯錫
許의정

【実行委員】

委員長 松山健作(京都教区)
副委員長 浮田倫太郎(京都教区)
副委員長 山田拓二(中部教区)
事務局長 司祭 矢萩新一(京都教区)
委員
聖職候補生 岩佐直人(沖縄教区)
河崎真理(東京教区) 佐藤由佳(京都教区)
司祭 柴本孝夫(九州教区) 下条展大(京都教区)
谷景子(京都教区) 司祭 八木正言(東京教区)
井田桃子(神戸教区) 司祭 小林聡(京都教区)

チャプレン 司祭 高良孝太郎(沖縄教区)

スペシャルサンクス

[通訳]

司祭 李香男 司祭 丁胤植 司祭 成成鐘
司祭 韓相敦 聖職候補生 金善姬

基調講演 谷昌二主教 (日本聖公会沖縄教区主教)

フィールド・トリップ 南部コース

石原絹子さん (日本聖公会沖縄教区司祭)

大城美代子さん (佐敷教会信徒)

佐喜眞道夫さん (佐喜眞美術館館長)

渡嘉敷コース

吉川嘉勝さん (渡嘉敷村教育委員会委員長)

セッション2

ひとり芝居 会沢芽美さん

琉球舞踊 踊り手 金城麻美さん 新里春加さん

辺野古訪問プログラム

新基地建設阻止活動に参加されている方々

宜野座映子さん 金井創さん 東恩納さん etc...

そのほか パシフィックホテル沖縄

JTB 東陽バス

15. 会計報告

2008年全国青年大会 予算

支 出		収 入	
科目	支出	科目	収入
実行委員会	2,500,000	管区 (「青年活動を覚えて祈る主日」信施より)	7,150,000
ホテルへの支払い	5,000,000	大会のための献金	350,000
フィールドトリップ	1,000,000	参加費 35,000円 × 100名 = 3,500,000円 30,000円 × 25名 = 750,000円	4,250,000
交通費補助	3,000,000		
報告書	250,000	合計	11,750,000
合計	11,750,000		

2008年全国青年大会 決算

支 出		収 入	
科目	支出	科目	収入
I 実行委員会	2,267,544	I 管区 (「青年活動を覚えて祈る主日」信施より)	7,312,099
II JTBへの支払い	9,798,237	II 参加費・航空券	6,620,720
III プログラム費用	736,718	III 献金	150,000
IV 交通費補助	1,137,910	合計	14,082,819
V 事務局(備品・送料等)	142,410		
VI 報告書			
合計	14,082,819		

16. ギャラリー

管区事務所だより

2008年9月10日 第229号

(11)

小祿聖マタイ教会、そして韓国から海を渡って来ていろいろな面で力づけてくださった大韓聖公会の先輩教役者に感謝します。

日本聖公会 全国青年大会 in 沖縄

「そこにキリストは共にいる」 —報告と成果—

全国青年大会実行委員長 松山 健作 (京都聖ステパノ教会)

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。(ヨハネの手紙 I 1:1)

「そこにキリストは共にいる」というテーマで、聖公会の青年140人あまり(大韓聖公会青年を含む)が沖縄に集まった。私たちが、沖縄に集まった意味はどこにあったのだろうか。そして沖縄で何を聞いて、見て、触れたのだろうか。

私たちは沖縄で戦跡をめぐり、辺野古に訪れ(米軍基地建設阻止運動の現場)、自然や文化に触れた。私はここで、プログラムから得たものの多くを語ることはしない。なぜなら、参加した各教区の青年が自らの豊かな感性で得たものを持ち帰っているためである。私たちは沖縄で多くの「命」と触れることができた。多くの青年が、その「命」について語るができるだろう。是非、参加者の皆様から「命の言」を参加していない皆様に伝えてほしい。そして、参加することができなかつた皆様は、参加した皆様に「命の言」について尋ねていただきたい。

今大会の主題の一つとして、「命」について聞き、見て、触れるということが意図されていた。そして私たちが神様から与えられる「命」について考え、分かち合うということはかけがえのない恵みとなったのである。

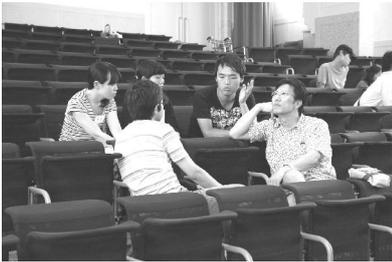
最終日のプログラムでは、教区ごとに集まり主題聖句である「命の言」についてセッションをおこなった。今回、得た「命」を通して、「それぞれの現場で何ができるのか」、「何が伝えられるのか」を話し合っていた。時間に制限はあったものの、各教区の青年が今後新しく活動していくきっかけとなつただろう。全国青年大会は3泊4日の短いものであったが、それをきっかけに私たちは新しい道に踏み出して行くことが望まれている。そのようなことを自覚していただければと思う。私は、参加者の皆様が各教区において、活動を始めたところから青年大会の成果が発揮されると考えている。次回青年大会は4年後に行われることであろう。是非、次回までに今大会の成果を発揮し、それについて分かち合うことができれば幸いである。

最後に、全国青年大会を開催するにあたりご





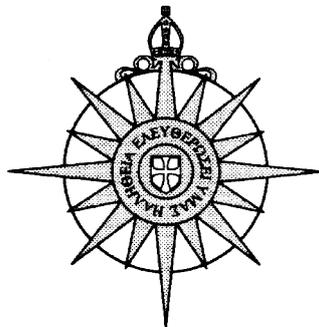












発行 日本聖公会 青年委員会